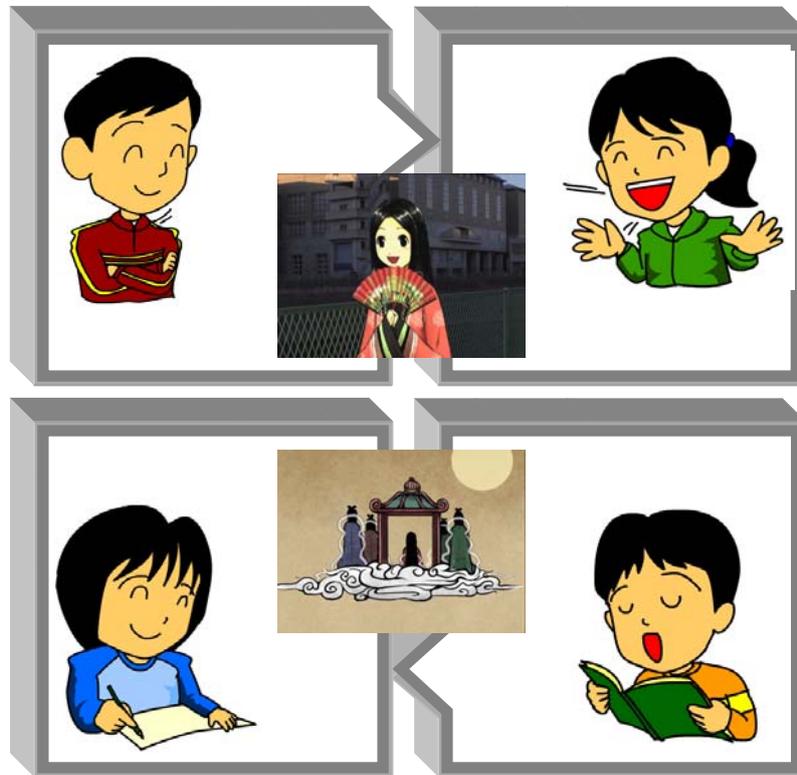


古典に親しもう

～小学校における古典教材と指導参考資料～



平成 21 年 3 月

神奈川県立総合教育センター

はじめに

平成18年12月に、約60年ぶりに教育基本法が改正され、前文の中で「我々日本国民は、たゆまぬ努力によって築いてきた民主的で文化的な国家を更に発展させるとともに、世界の平和と人類の福祉の向上に貢献することを願うものである。」とする理想を実現するために、「伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する。」ことが掲げられました。「教育の目標」の中でも、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」が挙げられています。

また、平成19年6月に改正された学校教育法において、教育基本法に規定された義務教育の目的を実現するための目標の一つに、「我が国と郷土の現状と歴史について、正しい理解に導き、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する態度を養うとともに、進んで外国の文化の理解を通じて、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」が掲げられています。

平成20年3月には、新しい幼稚園教育要領、小学校学習指導要領及び中学校学習指導要領が告示され、「国語」では、「各学年の目標及び内容」の中に、新たに〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が設けられました。そして、「ア 伝統的な言語文化に関する事項」において、小学校では、低学年から古典に関する事項を指導することになりました。

総合教育センターでは、こうした動向や新学習指導要領を見据え、平成19・20年度の2か年計画で、小学校における古典学習に資する研究に取り組み、映像教材の開発を行い、指導参考資料として本冊子を作成しました。

平成21年度からの移行期間中に、そして平成23年度からの全面実施以降にも、各小学校において古典に関する学習を指導する際の一助として、開発した映像教材である教育映像資料と併せて、本冊子をご活用ください。

平成21年3月

神奈川県立総合教育センター

所 長 安 藤 正 幸

目次

はじめに

目次

冊子の構成

第1章 小学校における古典の学習	-----	1
第2章 映像教材と学習指導案	-----	4
1 映像教材の概要	-----	4
2 学習指導案の概要	-----	6
3 チャプターごとの映像教材の内容と学習指導案	-----	8
チャプターⅠ（月）	-----	8
チャプターⅡ（季節）	-----	20
チャプターⅢ（生活）	-----	32
第3章 映像教材に関連した古典素材と活用案	-----	40
1 映像教材に関連した古典素材	-----	40
2 映像教材に関連した古典素材の活用案	-----	42
参考資料	-----	45
作成関係者		

【冊子の構成】

- **第1章**…新しい学習指導要領において、新たに加わった「伝統的な言語文化」や小学校低学年からの古典学習の概要について説明しています。また、小学校低学年から古典の学習をすることになった背景についても説明しています。
- **第2章**…総合教育センターでは平成20年度に、本冊子と併せて映像教材(DVD)を制作しました。制作した映像教材の内容について説明しています。また、その映像教材を授業で活用する際に参考となるような古典に関する解説、具体的な学習指導案を掲載しています。
☆映像教材…教育映像資料 きらめきかながわ「『**古典**』ってなあに？」
(制作・著作 神奈川県教育委員会・神奈川県立総合教育センター)
- **第3章**…映像教材に関連した古典素材の紹介とそれらを活用した活用案を掲載しています。
- **参考資料**…古典に関する授業を行う際に参考となる書籍・文献、Web ページ等を紹介しています。

第1章 小学校における古典の学習

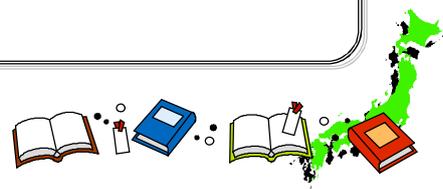
平成20年3月に、新しい幼稚園教育要領、小学校学習指導要領及び中学校学習指導要領が告示され、幼稚園は平成21年度から、小学校は平成23年度から、中学校は平成24年度から全面実施となります。

それに伴い、小学校においては、平成21年度より移行期間に入ります。

ここでは、新しい学習指導要領（小学校）における古典にかかわる内容についてみていきます。

新学習指導要領における小学校「国語」の目標は次のようになっています。

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。



「国語」では、各学年の目標及び内容の中に、新たに〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が設けられました。「小学校学習指導要領解説 国語編」では、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕について、次のような解説がなされています。

〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕は、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた伝統的な言語文化に親しみ、継承・発展させる態度を育てることや、国語の果たす役割や特質についてまとめた知識を身に付け、言語感覚を養い、実際の言語活動において有機的に働くような能力を育てることに重点を置いて構成している。

「ア 伝統的な言語文化に関する事項」において、小学校では、低学年から古典に関する事項を指導することになります。「小学校学習指導要領解説 国語編」では、言語文化について、次のような解説がなされています。

言語文化とは、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの、つまり文化としての言語、また、それらを実際の生活で使用するによって形成されてきた文化的な言語生活、更には、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを幅広く指している。今回の改訂では、伝統的な言語文化に低学年から触れ、生涯にわたって親しむ態度の育成を重視している。

「小学校学習指導要領解説 国語編」では、「各学年の目標及び内容」の系統表として、「伝統的な言語文化に関する事項」について、『A話すこと・聞くこと』、『B書くこと』及び『C読むこと』の指導を通して、次の事項について指導する。」として、次のように示されています。

第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
(ア) 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。	(ア) 易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。 (イ) 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。	(ア) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。 (イ) 古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

◇新「小学校学習指導要領」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/index.htm

◇新「小学校学習指導要領解説」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syokaisetsu/index.htm



■ 小学校低学年から古典の学習をすることになった背景 ■

新しい学習指導要領は、約3年に及ぶ審議を経てまとめられた平成20年1月17日の中央教育審議会答申等を踏まえたものです。小学校低学年から伝統的な言語文化について指導するようになった背景や経緯を知るための参考資料としては、次のようなものがあります。



◇平成16年 文化審議会「これからの時代に求められる国語力について」（答申）

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301.htm

Ⅱ「これからの時代に求められる国語力を身に付けるための方策について」の第1「国語力を身に付けるための国語教育の在り方」の2「学校における国語教育」の(2)「国語科教育の在り方」の中で「<音読・暗唱と古典の重視>」を挙げ、次のように説明しています。

「音読や暗唱を重視して、それにふさわしい文章を小学校段階から積極的に入れていくことを考えるべきである。特に日本の文化として、これまで大切にされ継承されてきた古典については、日本語の美しい表現やリズムを身に付ける上でも音読や暗唱にふさわしいものであり、情緒力を身に付け、豊かな人間性を形成する上でも重要なものである。現在以上に、古典に触れることのできるような授業の在り方が望まれる。」

◇平成 18 年 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会より「審議経過報告」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06021401.htm

2の(1)の②「具体的な教育内容の改善の方向」の一つに「2) 国語力、理数教育、外国語教育の改善」が挙げられており、その中の「ア 国語力の育成」に関しては、「知識・技能の定着」として、次のような説明があります。「小学校段階においては、読むことの力について体験的に身に付けるために、音読や朗読・暗唱が指導上有効であると考えられる。子どもが古典や名作に触れ我が国の言語文化に親しむ機会とすることも重要である。」

また、「思考力・表現力等の育成」については、次のような説明があります。「国語教育は、我が国の文学や言語文化を継承・発展させるという大きな使命がある。文学や言語文化に親しみ、創造したり演じたりするのに必要とされる、読書、鑑賞、詩歌や俳句なども含めた創作や書写などの言語活動ができることが重要である。」

◇平成 20 年 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(答申)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1216828_1424.html

国語科に関しては、小学校の低・中学年から、古典の暗唱などにより言葉の美しさやリズムを体感させることの重要性が挙げられています。また、新たに「言語文化と国語の特質に関する事項」を設け、古典の指導については「我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導を重視する。」としています。

◇平成 17 年度高等学校教育課程実施状況調査(平成 19 年 4 月に公表)

http://www.nier.go.jp/kaihatsu/katei_h17_h/index.htm (国立教育政策研究所)

調査結果における主な特色として、国語では次の二つが挙げられています。

「理由や根拠を基に自分の考えを記述する問題で無解答が多い」

「古典を読み味わう能力や古典の言語事項などに課題」

質問紙調査結果によれば、「国語の勉強が好きだ」という質問に対して、「どちらかといえばそう思わない」と「そう思わない」と回答した生徒の割合は 47.6%ですが、「古文が好きだ」、「漢文が好きだ」に対する「どちらかといえばそう思わない」と「そう思わない」という回答は、古文 72.7%、漢文 71.2%となり、これは他の教科・科目と比較して格段に高い割合となっています。

◇「小学校新教育課程説明会(中央説明会)での質問事項について」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/080717.pdf (平成 20 年 7 月文部科学省)

問 2-2 伝統的な言語文化に関する指導を重視する趣旨等はどのようなものですか。

答 2-2 古文や漢文等の伝統的な言語文化は、創造と継承を繰り返しながら形成されてきました。それらを小学校低学年から取り上げて親しむようにし、我が国の言語文化を継承し、新たな創造へとつないでいくことができるよう内容を構成しているものです。例えば、低学年では昔話や神話・伝承など、中学年では易しい文語調の短歌や俳句、慣用句や故事成語、高学年では古文・漢文などを取り上げています。なお、伝統的な言語文化に関する指導については、第 1 学年から第 6 学年までの各学年において継続して指導し、古典に親しめるよう配慮することが必要です。

第2章 映像教材と学習指導案

1 映像教材の概要

平成20年度に総合教育センターで制作した映像教材の概要について紹介します。

☆映像教材…教育映像資料 きらめきかながわ 『**「古典」ってなあに?**』

(制作・著作 神奈川県教育委員会・神奈川県立総合教育センター)

映像教材(DVD)は、三つのチャプターに分かれており、各チャプターは約5分、全体で約15分です。チャプターごとに、個別のテーマ(月・季節・生活)及び個別のジャンル(散文・韻文・言葉)を扱っています。対象学年としては、小学校中学年(第3学年及び第4学年)を想定したものとなっていますが、低学年・高学年でも使えるように配慮して作成したものでもあります。

なお、映像教材を活用した学習指導案(第2章の3)では、低学年・高学年での活用例についても触れています。



チャプターごとの主な内容は次のとおりです。

チャプターⅠ (景物 「月」・ 散文)	<ol style="list-style-type: none">1 学校帰り、月について話をしている子どもたちの前に、「かぐや姫」が現れる。2 「かぐや姫」と一緒に、平安時代に行き、月の明るさや月に対する昔の人の思いを知る。3 「竹取物語」を通して、古典(散文)に触れ、他の古典の物語を探したいと思う。4 現代に戻る。
チャプターⅡ (季節・ 韻文)	<ol style="list-style-type: none">1 公園で遊んでいる子どもたちの前に、「かぐや姫」に頼まれた「姫子」が現れる。2 「姫子」が朗読していた和歌に興味をもった子どもたちは、和歌や俳句というものを知り、四季の和歌や俳句を教わる。3 和歌や俳句を通して、古典(韻文)に触れ、和歌や俳句を作ってみようと思う。4 公園に戻って、和歌や俳句をつくるための季節の素材を探す。
チャプターⅢ (生活・ 言葉)	<ol style="list-style-type: none">1 新年になって、遊ぶために集まった子どもたちの話題が「七草がゆ」になる。2 青果店の前を通り掛かった時に、「七草」を発見し、店主に「七草がゆ」(「春の七草」と「秋の七草」)について教えてもらう。3 「春の七草」と「秋の七草」を通して、古典(生活の中の言葉)に触れ、言葉を通して伝えられる昔の人の知恵について考える。4 覚えただけの「春の七草」を暗唱する。

- 映像教材の中の古典の朗読は、特定の節等を付けないナレーションになっています。児童が自分なりに情感を込めて読む学習活動として活用してください。
- 映像教材で使用している映像素材は、当時の素材に近いものを表示するようにしましたが、再現できないものもあります。児童が自分なりにイメージを広げたり、映像と自分のイメージとを比較したり、当時の様子を考えたりする学習活動としても活用してください。
- 古典素材の表記(漢字、平仮名、片仮名、振り仮名)や解釈については、諸説あるものがあります。授業づくりの際には、授業者自身も解釈等について確認しながら、教材研究を深めてください。

チャプターごとに取り上げた古典素材と主な映像素材は、次のとおりです。

(◇古典素材、*映像素材)

<p>チャプターⅠ (景物「月」・散文)</p>	<p><「竹取物語」> ◇「竹取物語」冒頭：「今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきの造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。」 *竹の映像。 *平安時代の建物と月（中秋の名月）の映像。 *歌舞伎の「だんまり」の映像。 ◇「竹取物語」昇天：「今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでける」 ◇「竹取物語」昇天：「ふと天の羽衣うち着せたてまつりつれば、翁を、いとほし、かなしとおぼしつることも失せぬ。この衣着つる人は、物思ひなくなりなければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、昇りぬ。」 *昇天の場面の映像。</p>
<p>チャプターⅡ (季節・韻文)</p>	<p><春> ◇「人はいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける（紀貫之）」 ◇「ひさかたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ（紀友則）」 *風もなく穏やかな春の日、柔らかな日の光の中、山桜の散る映像。 ◇「石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも（志貴皇子）」 *岩の上をほとぼしり、くだける水の映像。わらびの映像。 <夏> ◇「目には青葉山ほととぎす初鯉（山口素堂）」 *青葉の映像。ほととぎすの映像と声。鯉の映像。 ◇「閑かさや岩にしみいる蟬の声（松尾芭蕉）」 *ニイニイゼミの映像。立石寺の映像。 <秋> ◇「名月を取つてくれろと泣く子かな（小林一茶）」 *満月の映像。 ◇「このたびはぬさもとりあへず手向山もみぢのにしき神のまにまに（菅原道真）」 *紅葉した山のもみぢの映像。 <冬> ◇「田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ（山部赤人）」 *雪をかぶった富士山の映像。 ◇「水仙や寒き都のここかしこ（与謝蕪村）」 *日本水仙の映像。都の雪景色の映像。</p>
<p>チャプターⅢ (生活・言葉)</p>	<p><春の七草> ◇「せり なずな ごぎょう はこべら ほとけのざ すずな すずしろ」 *春の七草の映像。 <秋の七草> ◇「秋の野に 咲きたる花を 指折り かき数ふれば 七種の花（山上憶良）」 「萩の花 尾花 葛花 撫子の花 女郎花 また藤袴 朝貌の花（山上憶良）」 *秋の七草の映像。</p>



2 学習指導案の概要

映像教材（DVD）を活用した学習指導案として、次の六つを掲載しています。

DVD	「単元名」 ねらい	主な学習内容	主な教材等	ページ
チャプター I	1 「かぐや姫とお月様の不思議を知ろう」 ○易しい文語の文章等を音読したり、暗唱したりすることで、古典に親しむ。	1 昔話には、古典（古文）を元にしたものがあることを知る。文語の文章の特徴を知る。 2 「竹取物語」について、古文を通して、幾つかの場面の内容や情景を理解する。 3 月に対する昔の人の思いを知る。	◆映像教材（DVD） ◇「竹取物語」 ◇「中秋の名月」の図や写真 ◇主な月の形の図 ◇月に関する和歌や俳句	12- 15
	2 「昔話を調べよう」 ○易しい文語の文章等を音読したり、昔話について調べたりすることで、古典に親しむ。	1 「竹取物語」の概要を知る。月に対する昔の人の思いを知る。文語の文章の特徴を知る。 2 いろいろな昔話があることや昔話の特徴を知る。 3 昔話が長い年月の中で語り継がれてきた言語文化であることを知る。	◆映像教材（DVD） ◇「竹取物語」 ◇「浦島太郎」、「一寸法師」等の昔話 ◇「浦島太郎」等の童謡や唱歌	16- 19
チャプター II	3 「和歌や俳句を知ろう」 ○和歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読したり暗唱したり、文章等で表現したりすることを通して、古典に親しみ、言葉についての興味を深める。	1 和歌や俳句の特徴を知る。 2 和歌や俳句を音読して、情景を想像し、その内容を文章等で表現する。 3 昔と今の違いを知る。	◆映像教材（DVD） 	25- 27
	4 「季節を身近に感じよう」 ○和歌や俳句を音読したり暗唱したりしながら、季節を感じ取り、昔の人々と共通した季節への思いや感じ方を知ることを通して、古典に親しむ。	1 考えたり、探したりして、季節を代表する風物を知る。 2 和歌や俳句に込められた昔の人の気持ちを知る。 3 季節を感じる風物には、昔の人と現代の自分とに共通点や相違点があることを知る。	◆映像教材（DVD） ◇二十四節気の表	28- 31
チャプター III	5 「ことわざに親しもう」 ○長い間使われてきたことわざの意味を知り、実際の生活の中で使う。	1 「春の七草」、「秋の七草」について知る。 2 言葉を通して昔の人々の知恵が現代に伝えられていることを知る。 3 いろいろなことわざや慣用句、故事成語があることを知る。	◆映像教材（DVD） 	34- 36
	6 「日本の歌を調べよう」 ○古くから歌い継がれている童謡や唱歌等を通して、五音七音のリズムや文語の調子を味わう。また、春夏秋冬の風物を追いながら、日本の昔からの季節の見方や感じ方を知る。	1 「春の七草」、「秋の七草」について知る。正月の風物について知る。正月の歌を知る。 2 二月以降の風物や歌について知る。 3 いろいろな季節の歌があることやその歌に込められた昔の人の思いについて知る。文語の特徴を知る。	◆映像教材（DVD） ◇正月風景の写真や映像 ◇行事や風物の写真や本	37- 39

学習指導案の書式は次のとおりです。

- 1 単元名 (学年)
- 2 単元の目標 ※単元(内容のまとまり)全体を通じたねらい(教科におけるねらいや付けたい力)を記載しています。
- 3 単元の設定について ※単元の目標の設定理由、扱う教材と単元指導計画との関連等について記載しています。
- 4 単元の評価規準(例) ※新学習指導要領に沿った評価規準に関する例が示されていないことから、国立教育政策研究所「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料(小学校)」を基に、現行学習指要領に沿った例を記載しています。

国語への関心・意欲・態度	話す・聞く能力 / 読む能力 / 書く能力	言語についての知識・理解・技能

☆印で、本単元に関連する新学習指導要領の目標や内容等について記載しています。

- 5 単元の指導計画 (○時間) ※単元単位での計画を記載しています。

時間	学習内容	学習活動	指導上の留意点
	評価(方法)	◇教材 ・ 予想される反応	手だて ☆教材活用のヒント
1	※1 教科として付けたい力や学ぶべき内容を記載。 ※2 □□□□ で、評価規準と評価の方法を記載。	※3 具体的な児童の学習活動を記載。(児童側から) ※4 ◇印で、教材を記載。 ※5 ・印で、予想される児童の反応を記載。	※6 □□□□ で、特に指導上の支援が必要な児童への「具体的な手だて」を記載。 ※7 ☆印で、映像教材の活用のヒントを記載。
2			
3			

※2について(評価の方法例)は、次の[材料]と[方法]とを組み合わせで記載しています。

[材料] … 行動、発言、記述(評価のための児童の現れ)

[方法] … 観察、確認、分析、点検

例: 行動の観察(音読・朗読、話し合い、スピーチ・発表) … 学習の中で求められている「行動」が行われているかどうかを「観察」する。

発言の確認 … 学習の中で「発言」した内容が求められている評価規準を満たしているかどうかを「確認」する。

発言の分析 … 「行動の観察」や「発言の確認」を通して「発言」された内容を、「分析」を行うことによりそのレベルを質として評価する。

記述の点検(ノート、ワークシート→授業中の学習支援の場面) … あらかじめ設定した評価規準に基づいて求められている内容が「記述」されているかどうかを、机間指導などにより「点検」する。

記述の確認(作文、レポートなど→学習を終えた後の評価場面) … 「記述」された内容が求めている評価規準を満たしているかどうかを、提出物などにより「確認」する。

記述の分析 … 「記述の点検」や「記述の確認」を通して「記述」された内容を、「分析」を行うことによりそのレベルを質として評価する。

<参考資料: 高木展郎「新しい指導案への考え方(小中学校)」より>

- 6 本単元に関連して ※取り上げた教材以外にも活用できる教材、学習活動例、本教材を他学年で活用する場合の提示方法、学習活動例等を記載しています。

3 チャプターごとの映像教材の内容と学習指導案

映像教材（DVD）の内容と学習指導案について、チャプターごとに紹介します。

チャプター I（月）

チャプター I は、昔の人が「月」にどのような思いを抱いていたのかを考えながら、なじみのある物語を「古典」として知り、古典（特に散文）に親しむことをねらいとしています。

【テーマについて】

チャプター I で取り上げたテーマは「月」です。昔の生活・ものの見方や感じ方と現代の生活・ものの見方や感じ方との違いが表れている代表的なものの一つとして、「月」を取り上げました。ここでは特に、「中秋の名月」を取り上げています。

コラム1 「中秋の名月」

- ・映像教材の中には、次のような「かぐや姫」のせりふがあります。

かぐや姫 「中秋の名月というのは、8月15日の夜の月のことなの。」

かぐや姫 「みんなの時代だと9月になるのよ。」

- ・現代の暦（太陽暦）は昔の暦（太陰太陽暦）よりもほぼひと月後になります。「中秋の名月」は旧暦8月15日の夜のことなので、現在では9月になります。
- ・しかし、8月15日と満月の日が一致しない場合が多く、満月の少し手前になっていることが多いので、その年によって日が異なります。

☆月の形と呼び名について、15ページ（コラム7）参照

☆暦については、次のWebページが参考になります。

◇国立国会図書館 「日本の暦について」

<http://www.ndl.go.jp/koyomi/index.html>



現代の児童には、暗闇がなかなか想像できないであろうことから、映像教材には、①月に雲が掛かり、真っ暗になる場面、②暗闇を表す動作のイラスト（歌舞伎の「だんまり」）があります。

コラム2 「だんまり」

- ・歌舞伎で、登場人物が無言で暗闇にさぐりあう動作を様式化したもの、またその場面のことを言います。真っ暗なので、間近にいる相手がお互いに見えないという様子を、面白く演じるものです。
- ・俳優を紹介する意味で独立した幕として演じられる「時代だんまり」、世話物の一場面としての「世話だんまり」があります。
- ・「時代物」とは武家や貴族階級を中心としたもので、「世話物」とは一般民衆（特に江戸時代の町人）の社会（事件）を主題としたものです。



昔の人々が月に対してどのような思いを抱いていたのかを考える場面として、映像教材に登場する子どもたちとナレーターである「かぐや姫」は次のような会話をしています。

子ども 「きれい！こんなふうに見たことなかったなあ。」
(月をゆっくり眺めたことがなかったことに気付く。)

子ども 「え？昔って月がないとこんなに暗かったの？」
(昔は月がとても明るく感じられたことに驚く。)

かぐや姫 「今と違って、昔は電気がなくて暗かったから、昔の人にとっては、月の光はとても明るくて、不思議なものだったの。」
(昔は月がとても明るく感じられ、昔の人にとって月が不思議なものであったことを教える。)

子ども 「へー。昔の人って、月を見ながらどんなことを考えたのかな？」
(昔の人が何を考えたのかを知りたいと思う。)

かぐや姫 「昔の人は月に特別な思いをもっていたの。月があまりにきれいで神秘的だったから、月に人が住んでいると思ったのね。」
(昔の人が月に対して抱いた思いに触れる。)

コラム3 「月」に対する思い

- ・現代の暦は太陽の動きにより作られていますが、昔は月の満ち欠けによるものでした。昔の人々は、月を目安にして、月の形と場所によって、時や方角を知り、月の明りを頼りに暮らすなど、月は昔の人々の生活に欠かせないものでした。
- ・日本では古来、自然を代表するものの一つとされ、特に秋の月、満月の美しさ等を賞賛してきました。「花鳥風月」、「雪月花」という表現もあります。
- ・暗闇の中で煌々と光る月、また、形を変える月（満ち欠けする月）、位置を変える月に対して様々な思いを抱いてきました。満月の美しさや愛でる、月へのあこがれを抱く、畏敬の念を抱く等々、昔の人々の月への思いは物語や和歌等の中に多く見られます。

昔の装束や建物については、「かぐや姫」の衣装や背景に見える平安時代の建物を基にして考えられるような映像としています。映像教材の中で、宙に浮いている「かぐや姫」の裾に見えるのは足ではなく紐です。着物から足が見えることはなく、古くは足袋も履かずに素足で過ごしていました。なお、映像教材の中の建物は、平安時代を再現した実在する建物です。

(協力：財団法人国史跡齋宮跡保存協会 「いつきのみや歴史体験館」)

コラム4 平安時代の装束と建物

- ・平安時代の装束については、次の Web ページが参考になります。
◇風俗博物館 日本装飾史 資料「平安」
http://www.iz2.or.jp/fukushoku/f_disp.php?page_no=0000024
(このサイトには、縄文～昭和前期が載っています。)
- ・平安時代の建物については、次の Web ページが参考になります。
◇風俗博物館 貴族の生活 (住居、調度品、遊びが載っています。)
<http://www.iz2.or.jp/kizoku/index.html>
◇財団法人国史跡齋宮跡保存協会 「いつきのみや歴史体験館」
<http://www2.mint.or.jp/~itukino/index.html>



【ジャンルについて】

CHAPTER I で取り上げたジャンルは「散文」（韻律や字数などの制限のない通常の文章）です。「散文」は、昔話等を通じて、児童には親しみのあるジャンルでもあります。

映像教材で取り上げた「竹取物語」は、児童になじみのある「かぐや姫」の元となる物語であり、日本最古の物語（作者未詳、平安初期成立）です。「古文」として取り上げた箇所は、冒頭と昇天（二箇所）の場面の合計三箇所です。

古文	現代語訳
<p>いまは昔、竹取の翁といふものありけり。 野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。 名をば、さぬきの造となむいひける。</p> <p>その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。 あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。</p> <p>それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてあたり。</p>	<p>今は（もう遠い）昔、竹取の翁というものがおったそうだ。 （その翁は）野や山に分け入って竹を伐り取っては、様々な道具を作ることに使っていた。 （翁の）名を、讃岐の造といった。</p> <p>その（毎日取る）竹の中に、根本が光る竹が一本あった。 （翁は）不思議に思っただけのそばへ寄って見ると、筒の中が光っている。 それを（よく）見ると、三寸ほどの人が、たいそうかわいらしい姿で竹の中に座っていた。</p>

冒頭

<解説>

○「三寸」は、約9センチです（一寸は約3.03センチ）。

- ・古来「三」は神秘数と言われています。「竹取物語」の中には、「三」という数字がしばしば登場します。

※物語から「三」を探してみる学習活動も考えられます。

○次の二つの古語にはいろいろな意味があります。

(1) 「あやし」

- ア「奇し」、「怪し」、「異し」… ①不思議だ。神秘的だ。 ②異常だ。並々でない。
③疑わしい。不審だ。 ④けしからぬ。不都合だ。

イ「賤し」… ①見苦しい。粗末だ。 ②身分が低い。いやしい。

(2) 「うつくし」

- 「愛し」、「美し」… ①かわいい。いとしい。 ②（小さくて）かわいらしい。愛らしい。
③きれいだ。うるわしい。

※昔と今とで意味が異なる言葉もあることを知る学習活動も考えられます。

昇天①

古文	今はとて 天の羽衣 着るをりぞ 君をあはれと 思ひ出でける
現代語訳	今は（これまで）と思って、 天の羽衣を 着る時になつて、 帝さまをしみじみと慕わしく 思い起こしましたよ。

昇天②

古文	ふと天の羽衣うち 着せてまつりつれ ば、翁を、いとほし、 かなしと思しつるこ とも失せぬ。
現代語訳	さつと天の羽衣を（かぐや姫 に）着せ申し上げたので、（か ぐや姫は）翁を、いとおしく（思 うことも）、気の毒に思うこと も消えてしまった。

この衣着つる人は、物思ひなくなり
にければ、車に乗り
て、百人ばかり天人
具して、昇りぬ。

この衣を着た人は、物思ひが
なくなつてしまったので、（飛
ぶ）車に乗つて、百人ばかりの
天人を引きつれて、（天へ）昇
つてしまった。

コラム5 昇天と「羽衣」

- ・映像教材の中では、かぐや姫と天人が月に帰って行くアニメーションがあります。
- ・かぐや姫を天人が迎えに来たのは、「子」の刻（午前零時頃）で、家のまわりが昼間の明るさ以上に輝いて、それは「望月」（満月）の明るさを十合させた程だったとあります。
- ・天人が到来する場面や昇天の場面を描いた絵巻物には様々なものがあります。昇天の場面でいえば、天人が「天女」だったり「童子」だったり、装束が「和風」だったり「唐風」だったり、乗物の種類も様々で、乗物が描かれていないものもあります。詳細については、次のWeb ページが参考になります。

◇北海道教育大学教育学部札幌校古典文学研究室（管理者：中島和歌子）

『竹取物語』の絵巻や奈良絵本について（ウェブサイト、書籍、研究論文等）

<http://www.sap.hokkyodai.ac.jp/nakajima/waka/data/taketori.html>

- ・昇天に際して、かぐや姫は、「不死の薬」をわざわざになめ、「天の羽衣」をまといます。
- ・「羽衣」については、「羽衣伝説」が元になっていると言われています。

☆「羽衣伝説」については、18 ページ（コラム8）参照

- ・なお、かぐや姫が竹から生まれたことは、「竹中生誕説話」が元になっていると言われており、「竹」は他の植物よりも短時間に著しく生長する植物であることから、神秘的であり、神聖な植物として、こうした伝説が生まれたようです。
- ・「竹」にも色々な種類があります。本邦固有種の真竹（マダケ）、外来種の淡竹（ハチク）・孟宗竹（モウソウチク）等々、日本に生息する竹は百種類程が確認されています。「竹取物語」に登場する竹の種類については、真竹、淡竹などの説があります。



国語科 学習指導案 1 (チャプターI-1)

1 単元名 かぐや姫とお月様の不思議を知ろう (第3学年及び第4学年)

2 単元の目標

易しい文語の文章等を音読したり、暗唱したりすることで、古典に親しむ。

3 単元の設定について

(1) 目標について

本単元では、低学年において特に読み聞かせ等で親しんできた昔話の「かぐや姫」から、古典そのものである「竹取物語」に触れ、古文の一部を音読したり暗唱したりすることを通して、文語のリズムや言葉遣いを知り、古典に親しませることをねらいとした。

その後、月の呼び名や月に関する行事等、また、月に関する和歌や俳句を通して、昔の人々の月に対する思いを知るとともに、和歌や俳句という我が国独自の表現形式の面白さを感じること、和歌や俳句に興味をもたせることをねらいとした。それにより、高学年において、古典の文章を読み広げていこうとする意欲につなげることもねらいとした。

(2) 学習活動について

「古典」という言葉を初めて聞く児童が多いことが予想されるので、最初に幾つかの昔話を取り上げるようにする。その中から、多くの児童が知っているであろう「かぐや姫」の話に注目させ、「竹取物語」の紹介へとつなげ、日本最古の物語であることにも触れる。「竹取物語」については、古文の一部を音読する際に、意味の分かるところはないかを探させたり想像させたりした後に、チャプターIを視聴し、内容や情景を理解し、「竹取物語」の古文の一部を暗唱させるようにする。

さらに、中学年理科では太陽の運行、月の運行を学習することから、それらと関連させながら、月の呼び名等を紹介したり、月に関係のある和歌や俳句を音読したり暗唱したりする学習活動を通して、昔の人の月に対する思いや憧れについて触れる。

4 単元の評価規準 (例)

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
いろいろな読み物に興味をもち、考えや感じ方の違いに気付いて読もうとしている。	語句の意味を考え、情景を想像しながら読んでいく。	様子を表す語句や主語になる語句などに注意し、語句の役割を理解している。

☆本単元は、新学習指導要領の「読むこと」の(1)・ア「内容の中心や場面の様子がよく分かるように音読すること。」や(2)・ア「物語や詩を読み、感想を述べ合うこと。」などに関連します。

☆また、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の(1)・ア・(7)「易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。」に関連します。

5 単元の指導計画（3時間）

時間	学習内容 評価(方法)	学習活動 ◇教材 ・予想される反応	指導上の留意点 手だて ☆教材活用のヒント
1	<p>○昔話には、古典（古文）を元にしたものがあることを知る。</p> <p>○文語の文章の特徴を知る。</p> <p>【知識・理解・技能】 様子を表す語句や主語になる語句などに注意し、語句の役割を理解している。（発言の確認）</p>	<p>1 昔話を思い出す。 ・「かぐや姫」等の昔話</p> <p>2 「竹取物語」の幾つかの場面を音読して、内容や情景を想像する。 ◇「竹取物語」</p> <p>3 気になる言葉を挙げ、語句の意味を想像し、自分なりの解釈を考え、グループで話し合う。</p>	<p>・昔話を思い出すときに、クイズ形式を使うことで興味をもたせるようにする。</p> <p>☆古文が出てくる映像場面を静止画として提示したり、印刷し配ったりして、活用する。</p> <p>・話し合いを通じて、古文（文語）のリズムを感じ取らせるようにする。</p> <p>どう読んだかをなかなか表現できない児童には、気になる表現に注目させ、それを発表させるようにする。</p>
2	<p>○「竹取物語」について、古文を通して、幾つかの場面の内容や情景を理解する。</p> <p>【読む能力】語句の意味を考え、情景を想像しながら読んでいる。（行動の観察）</p>	<p>1 チャプターIを視聴する。 ◇映像教材（DVD）</p> <p>2 映像及び授業者の説明から、「竹取物語」の内容や情景を知る。</p> <p>3 「竹取物語」を暗唱する。</p>	<p>・想像したことや話し合ったことと比較しながら視聴させる。</p> <p>・第1時に児童が気になった言葉については解説を加えながらも、詳細な説明にならないように注意する。</p> <p>・内容を理解した上で、情感を込めて音読・暗唱させる。</p> <p>なかなか読めない児童には、間違いを気にせずに声に出してみるように伝える。</p>
3	<p>○月に対する昔の人の思いを知る。</p> <p>【関心・意欲・態度】 いろいろな読み物に興味をもち、考えや感じ方の違いに気付いて読もうとしている。（行動の観察）</p> 	<p>1 チャプターIを視聴する。 ◇映像教材（DVD）</p> <p>2 月に対する昔の人の思いを知る。</p> <p>3 月の呼び名等を知るとともに、月に関する和歌や俳句を音読する。 ◇「中秋の名月」の図や写真 ◇主な月の形の図 ◇月に関する和歌や俳句</p>	<p>☆月が雲に隠れる場面を視聴し、今との違いを確認させる。</p> <p>・昔は、今よりも「月」が明るく感じられたことや昔の人が「月」にあこがれを抱いていたこと等について触れる。</p> <p>・月の形を切り取ったものに、現代と昔の呼び名を並べて提示し、理由を考えさせるようにする。</p> <p>現在との違いをつかみにくい児童には、気になった言葉などを選ばせるようにする。</p>

6 本単元に関連して

月が昔から人々の生活に密着したものであったことを、月の呼び名、和歌や俳句から感じ取らせるようにします。

☆月を詠んだ和歌や俳句は、31 ページを参照

☆月の形と呼び名は、15 ページ（コラム7）を参照

※月の呼び名や月に関する行事から、暦法を知ることにつなげていく授業展開も考えられます。

☆暦法については、コラム6を参照

※短歌や俳句を各自で作って、読み合う活動も考えられます。

中学年理科では、月について学習します。月の形による呼び名は次の四つです。

「新月」（月の第1日 地球からは一日中見えない。）

「半月（上弦）」（7～8日頃 日没時に南中し、月の右半分が輝く。）

「満月」（15日頃）

「半月（下弦）」（22～23日頃 日出時に南中し、月の左半分が輝く。）

コラム6 暦法

干支 ・「干支（十干十二支）」は、「十干」と「十二支」のことです。また、それらの組合せのうちの60とおりのことです。中国に始まり、この60の周期で年月日を数える方法が暦に使われるようになりました。

「十干」…「甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辰・壬・癸」

「十二支」…「子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥」

・「十二支」は、時刻や方角を表す際にも用いられていました。

時刻) 夜半を子とし、一日を12辰刻に分け、1辰刻を4刻に分けました。

「子の刻」は0時を中心とした2時間（23時～1時）になります（定時法）。

* 「定時法」（昼夜を通して等分した方法）と「不定時法」（季節によって昼夜の一時間の長さを変える方法）とがあります。

方角) 真北を子とし、12に分けました。東は卯、南は午、西は酉となります。

東西南北の間の方角は、北東を艮（←丑寅）、南東を巽（←辰巳）、

南西を坤（←申未）、北西を乾（←戌亥）と呼びます。

月の異名

・1月から12月までの月の呼び方として、次のようなものがあります。

1月…「睦月」 2月…「如月」 3月…「弥生」

4月…「卯月」 5月…「皐月」 6月…「水無月」

7月…「文月（ふづき、ふみづき）」 8月…「葉月」 9月…「長月」

10月…「神無月（かんなづき、かみなづき）」 11月…「霜月」 12月…「師走」

・他の呼び方もあり、地域によっても異なります。



コラム7 月の形と呼び名

- 昔の人の月への思いは、月の満ち欠けによる呼び名等にも表れています。
- 主な月の名前と月齢は次のとおりです。「月齢」とは、新月の時刻を0として起算する日数のことで、周期は約29.5日です。

「新月」、「朔（さく）」1日
「二日月」2日頃
「三日月」、「眉月」3日頃
「上弦月」、「上の弓張」7日頃
「十日余月（とおかあまりのつき）」10日頃
「十三夜」13日頃
「十四日月」、「小望月（こもちづき）」14日頃
「十五夜」、「満月」、「望月」15日頃
「十六夜（いざよい）」16日頃
「立待月（たちまちづき）」17日頃
「居待月（いまちづき）」18日頃
「寝待月（ねまちづき）」、「臥待月（ふしまちづき）」19日頃
「更待月（ふけまちづき）」20日頃
「二十日余月（はつかあまりのつき）」22日頃
「二十三日夜」、「下弦」、「下の弓張」23日頃
「有明の月」（16日頃以降、特に20日過ぎ）
「三十日月（みそかづき）」、「晦（つごもり）」30日頃



- 月の出る時刻は、場所によっても異なります。月の出入りの時刻、高度と方位、月齢などについては、次のページで計算できます。

◇国立天文台 天文情報センター 暦計算室 <http://www.nao.ac.jp/koyomi/>

- この他にも、月の様子によって、次のような呼び名があります。

「朧月（おぼろづき）」 ほのかに霞んだ月。春の季語。
「薄月（うすづき）」 薄雲のかかった月。
「淡月（たんげつ）」 光の淡い月。
「雨月（うげつ）」 雨の夜の月。十五夜が雨で見えないとき。
「夕月（ゆうづき）」 夕方にみえる月。
「孤月（こげつ）」 寂しげにみえる月。
「青月（せいげつ）」 青く輝く月。
「皓月（こうげつ）」 明るい月。
「素月（そげつ）」 光の清らかな月。
「明月（めいげつ）」、「朗月（ろうげつ）」 清く澄んだ月。
「寒月（かんげつ）」 冷たく冴えてみえる月。冬の季語。



※「隈なし」（陰がない）を用いて月を形容することもあります。
（例：「隈なき月影」）

国語科 学習指導案 2 (チャプターI-2)

1 単元名 昔話を調べよう (第3学年及び第4学年)

2 単元の目標

易しい文語の文章等を音読したり、昔話について調べたりすることで、古典に親しむ。

3 単元の設定について

(1) 目標について

新学習指導要領では、低学年から伝統的な言語文化に触れ、生涯にわたって親しむ態度の育成を重視している。そこで、本単元では昔話として、低学年等で読み聞かせ等で親しんできた「かぐや姫」の原話である「竹取物語」を紹介し、古文の一部を音読したり暗唱したりして古文のもつ独特のリズムを感じさせ、古典に親しませることを最初のねらいとした。

また、「竹取物語」の昇天の場面(羽衣)から羽衣伝説について紹介したり、唱歌などでなじみ深い「浦島太郎」等の知っている昔話を挙げさせたりすることで、昔話について調べる学習活動につなげ、広く古典の世界に触れさせていくことをねらいとした。

(2) 学習活動について

「竹取物語」を扱った映像教材(DVD)の視聴を通して、古文のもつリズムや昔の人々の生活の違いなどを考えさせるようにする。そして、古文を音読することで、言葉の違いに気付かせるようにする。

次に、「竹取物語」の昇天の場面を視聴し、「羽衣伝説」についての説明から、関連する昔話であり、神奈川県にゆかりのある昔話として「浦島太郎」を取り上げることで、昔話の調べ学習につなげる。調べた内容を発表し合うことで、できるだけ多くの古典に触れさせるようにする。

また、昔話に関する童謡や唱歌を知り、歌うことを通して、児童が更に興味・関心をもてるように工夫した。

4 単元の評価規準(例)

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
いろいろな読みものに興味をもち、進んで読もうとしている。	読み取った内容について自分なりに感想や意見などをまとめている。	文章全体における段落の役割を理解している。

☆本単元は、新学習指導要領の「読むこと」の(1)・カ「目的に応じて、いろいろな本や文章を選んで読むこと。」や(2)・エ「紹介したい本を取り上げて説明すること。」などに関連します。

☆また、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の(1)・ア・(7)「易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。」に関連します。

5 単元の指導計画（3時間）

時間	学習内容 評価(方法)	学習活動 ◇教材 ・予想される反応	指導上の留意点 手だて ☆指導のヒント
1	<p>○「竹取物語」の概要を知る。</p> <p>○月に対する昔の人の思いを知る。</p> <p>○文語の文章の特徴を知る。</p>	<p>1 「かぐや姫」のあらすじを思い出す。</p> <p>2 チャプター I を視聴する。 ◇映像教材 (DVD)</p> <p>3 映像教材を見て気付いたことを発表し合う。 ・現代との生活の違い ・言葉の違い 等</p> <p>4 「竹取物語」の最後の場面 (和歌や富士山の名前の由来等) について古文を通して知る。 ◇「竹取物語」</p> <p>5 内容を理解して、「竹取物語」を音読する。</p>	<p>・○×クイズにするなどして、児童の興味を喚起する。</p> <p>・昔は、今よりも「月」が明るく感じられたことや昔の人が「月」にあこがれを抱いていたこと等について触れる。</p> <p>気付いた点をなかなか表現できない児童には、気になる表現に注目させ、それを発表させるようにする。</p> <p>・詳しい語句の解釈はせずに、あらすじの説明にとどめる。</p> <p>・何度も音読をすることで、古文のもつリズムを感じられるようにさせる。</p>
2	<p>○いろいろな昔話があることや昔話の特徴を知る。</p> <p>【関心・意欲・態度】いろいろな読みものに興味をもち、進んで読もうとしている。(行動の確認)</p> <p>【知識・理解・技能】文章全体における段落の役割を理解している。(記述の点検)</p>	<p>1 チャプター I を視聴する。 ◇映像教材 (DVD)</p> <p>2 「竹取物語」の冒頭を音読する。</p> <p>3 昔話を思い出す。 ・「浦島太郎」、「一寸法師」等の昔話</p> <p>4 古典を元にした昔話としてどのようなものがあるのかを調べ、あらすじをまとめる。</p> <p>5 調べた内容についてまとめる。</p> 	<p>☆昇天の場面を視聴させ、「羽衣伝説」について説明したり、「竹取物語」冒頭を音読させたりすることで、いろいろな昔話があることや昔話の特徴について触れる。</p> <p>例)「今は昔」で始まる等</p> <p>・「一寸法師」など、児童が読めそうな昔話を用意しておく。</p> <p>何から調べてよいか分らない児童には、知っている昔話から調べさせるようにする。</p>
3	<p>○昔話が長い年月の中で語り継がれてきた言語文化であることを知る。</p> <p>【読む能力】読み取った内容について自分なりに感想や意見などをまとめている。(記述の分析)</p>	<p>1 調べた昔話について発表し合う。気付いたことをメモに取る。</p> <p>2 昔話に関連した童謡や唱歌を知り、歌う。 ◇「浦島太郎」等の童謡や唱歌</p> <p>3 御伽草子「浦島太郎」の冒頭部分の範読やあらすじの説明を聞き、知っている昔話との違いを知る。</p>	<p>・神奈川県や地域ゆかりの昔話を取り上げるようにする。</p> <p>・歌詞カードや範唱用CD等を用意し、楽しく歌えるようにする。</p> <p>なかなか歌えない児童には、間違いを気にせずに、まずは声に出してみるように伝える。</p>

6 本単元に関連して

低学年で学習した昔話、神奈川県や地域にゆかりのある昔話、年中行事にまつわる昔話などを取り上げ、元になっている古典について調べ、古典に興味をもって読もうとする態度、古典に親しむ態度の育成につながるようにします。



※年配者（祖父母や近所の人）に昔話について聞いてみるという学習活動も考えられます。

※国語で扱われる「世界の民話」と比べる学習活動も考えられます。

※様々な絵本を並べて、読み比べる学習活動も考えられます。

※低学年では、読み聞かせ、紙芝居等により、内容を紹介する学習活動も考えられます。

コラム8 「羽衣伝説」

- ・「羽衣」とは、天人が着て空中を飛ぶという薄くて軽い衣のことです。鳥の羽で作るとされます。
- ・「羽衣伝説」とは、天女が羽衣を盗まれて天に帰れずに、隠した男と夫婦になって暮らすうち、羽衣を探し出して昇天するという伝説です。日本各地に、類似のものが多くあります。
- ・また、七夕伝説と融合したり、浦島伝説と融合したりと、様々な話があります。
- ・「羽衣伝説」自体も、世界的に分布する「白鳥処女説話」の一つです。この説話は、白鳥などの動物が若い女性の姿で現れ、人間の男性がその衣をうばって妻とするが、女性は衣を取り返して、元の姿に戻って飛び去るという内容です。

昔話として、次のようなものを取り上げることが考えられます。

「平家物語」（「牛若丸と弁慶」、「耳なし芳一」等に関連して）、

「古事記」（「因幡の素兔」、^{いなば}「やまたのおろち」等に関連して）、

「雨月物語」、「伊曾保物語」等

☆参考資料

『はじめてであう日本の古典』全15巻 小峰書店（1998年）

『21世紀に読む日本の古典』全20巻 西本鶏介監修 ポプラ社（2001～2002年）等

※高学年では、「今昔物語集」を取り上げて、芥川龍之介の作品と読み比べる学習活動も考えられます。

※昔話を読んで、物語の続きを書いたり、物語を書き換えたりといった学習活動も考えられます。

☆この場合には、「書くこと」の学習として、新学習指導要領の「書くこと」の(1)・イ「文章全体における段落の役割を理解し、自分の考えが明確になるように、段落相互の関係などに注意して文章を構成すること。」や(2)・ア「身近なこと、想像したことなどを基に、詩をつくったり、物語を書いたりすること。」と関連させて授業を作ることも考えられます。

コラム9 昔話と「御伽草子」

- ・「浦島太郎」の元になる話は、「日本書紀」や「万葉集」、「風土記」などに見られ、それ以降、各時代にわたって最も多くの文献に見られる昔話です。「御伽草子」としても「浦島(嶋)太郎」があります。類似の説話は世界に広く分布しています。

御伽草子「浦島太郎」の冒頭

「昔、丹後国に浦島といふ者侍りしに、その子に浦島太郎と申して、年のよはひ二十四五の男ありけり。明け暮れ、海のうろくづを取りて、父母を養ひけるが、ある日のつれづれに、釣をせむとて出でにけり。浦々島々、入江入江、至らぬ所もなく、釣をし、貝を拾ろひ、みるめを刈りなどしけるところに、忽しまが磯といふ所にて、亀を一つ釣り上げける。」



- ・神奈川県横浜市神奈川区には、浦島太郎の伝説が残っていて、浦島太郎ゆかりの地名やお寺や石碑等があります。
- ・「御伽草子」は、広義には、南北朝時代から江戸時代初期までの約400年間に作られた短編の物語の総称です。現在、約400編以上残されていますが、内容は様々です。
- ・「御伽草子」の中には、児童になじみのある次のような物語が含まれますが、児童がよく知っている話と描写の仕方は異なります。(例)「一寸法師」「鉢かづき」「酒^{てん}顛童子」

コラム10 「竹取物語」と富士山

- ・「竹取物語」の終わりの部分には、現在の富士山が登場します。
- ・かぐや姫から「御文」(和歌をしたためたもの)と「薬の壺」(不死の薬)を贈られた帝は、嘆き悲しみます。そして、どの山が天に近いかを尋ね、駿河の国にあるとかいう山が、都にも近く、天にも近いと聞き、次のような手紙(返歌)をかぐや姫にしたためます。

「逢ふこともなみだに浮かぶ我が身には死なぬ薬も何にかはせむ」

<現代語訳> 姫に再び会われぬゆえに、悲し涙に浮かぶ我が身には、不死の薬が何の役に立とうか。いまさら不要なことだ。

- ・手紙と壺を使いの者に渡し、山頂でそれらを燃やすように命じます。
- ・そして、「竹取物語」は次のように終わります。

「そのよし承りて、土(つわもの)どもあまた具して山へ登りけるよりなむ、その山を富士の山とは名づけける。その煙、いまだ雲の中へ立ち上るとぞ言ひ伝へたる。」

<現代語訳> その旨を承って、(調のいわかさが) 兵士たちを大勢引き連れて山に登ったことから、その山を(土に富む山、つまり) 富士の山と名づけたのであった。(そして、不死の薬を燃やした) その煙は、いまだに雲の中へ立ち上っていると言いつづけている。

- ・「不死の薬」を焼いたので、永遠に煙が立ち上るという説明になっています。
- ・「不死の薬」を焼いたので、「不死の山」つまり「富士の山」と名付けたとされているものもあります。



CHAPTER II (季節)

CHAPTER IIは、昔の人が「季節」をどのように感じ、表現したのかということを考えながら、リズムのある和歌や俳句・俳諧を「古典」として知り、古典（特に韻文）に親しむことをねらいとしています。

【テーマについて】

CHAPTER IIで取り上げたテーマは「季節」です。昔の人のものの見方や感じ方と現代の人々のものの見方や感じ方との相違点が表れている代表的なものの一つとして、「季節」を取り上げました。

現代は昔に比べ季節感が乏しくなっているので、四季の代表的な風物、子どもたちにもなじみのある風物等を詠んだ和歌や俳句を選び、それらに詠まれた風景等を映像にしました。

【ジャンルについて】

CHAPTER IIで取り上げたジャンルは「韻文」（単語や文字の配列や音数に一定の規律のあるもの。詩・短歌・俳句など）です。「韻文」は、かるたや標語等を通じて、児童には親しみのあるリズムをもつジャンルでもあります。

☆和歌の種類については、27ページ（コラム13）参照

映像教材では、春夏秋冬それぞれに二つの和歌・俳句を取り上げました。

コラム11 春：「花」といえば

- 映像教材の中には、登場人物の子どもと「かぐや姫」の花をめぐる次のようなせりふがあります。

かぐや姫 「春と言えば花がきれいよね。みんなは花というと何を思い出す？」

子ども 「さくら！」

かぐや姫 「そうね。でも、ずっと昔は花と言えば梅のことだったの。
さっきの和歌は梅の花を詠んだものなのよ。」

子ども 「そうなんだ。」

子ども 「そういえば、お正月を新春といって、梅の花を飾ってた。」

かぐや姫 「そうね。梅は春一番に咲くのよね。」

- このせりふのように、古くは特に「梅」の花のことを指し、平安後期以降は「桜」の花を指すようになりました。桜にも様々な種類がありますが、映像教材では古来、日本に自生していた「山桜」（山桜系）を取り上げました。
- 映像教材の中で取り上げた梅の花を詠んだ和歌は次のとおりです。

「人はいさ心もしらずふるさは花ぞ昔の香ににはひける（紀貫之）」

<現代語訳>人の心の中は、さあどうだか分かりません。けれど（昔なじみの）

梅の花は確かに以前のままの香りで咲いていますね。



古文	現代語訳
ひさかたの ひかりのどけき春の日に しづ心なく花のちるらむ (紀友則)	日の光がのどかにさす 春の日に、(どうして)落 ち着いた心もなく、桜の花 は散り急ぐのであろうか。 *風もなく穏やかな春 の日の柔らかな日の 光の中で、山桜の散る 様子(春の昼の深閑と した空間に散る落花 の姿)。
石走る垂水の上の さわらびの萌え出づる 春になりけるかも (志貴皇子)	岩に水をほとばしらせ ている滝のほとりに、芽を ふくわらび。そのわらびの 青々と萌え出る春が今や つてきたのだなあ。 *水しぶきの白さとわ らびの新芽の緑との 対比の美しさ、生命の 躍動感。

<解説>

○紀友則の和歌(「ひさかたの～」)には、「枕詞」として「ひさかたの」が使われています。

- ・「枕詞」とは、特定の語の上について、修飾または語調を整えるのに用いる言葉のことで、主に五音からなります。(四音のものもあります。三音・六音のものもまれにあります。)

「枕詞」とそれが掛かる言葉との関係は、譬喩、形容、説明、連想、同音・類音の反復など様々です。

- ・「ひさかたの」は天空に関係ある語に掛かります。この和歌では「ひかり」にかかり、語調を整えています。

※他の和歌(百人一首など)に使われている「枕詞」を探すという学習活動も考えられます。

例)「ひさかたの(久方の)」→「天(あめ、あま)」「空」「光」「雨」「雲」「夜」等

「あしひきの(あしびきの)」→「山」「峰」「尾上(をのへ=おのへ)」

「いはばしる(石走る)」→「滝」「垂水」「近江〔淡海〕(あふみ=おうみ)」

*志貴皇子の和歌の「石走る」には、枕詞とする説、そうではなく実景を写したとする説などがあります。

「さねさし」→「相模(さがむ)」(神奈川県ほぼ全域)



○志貴皇子の和歌は、「万葉集」に登場します。

- ・「万葉集」の多くが五七調(五音・七音の順に繰り返す形式)で詠まれています。短歌では、二句切れ・四句切れとなり、素朴な感じや厳かで重々しい感じがします。
- ・七五調(七音・五音の順に繰り返す形式)は、「古今和歌集」以降に多く詠まれています。短歌では、初句切れ・三句切れとなり、優美な感じや軽快な感じがします。

※五七調の和歌と七五調の和歌とをリズムに気を付けて読み比べてみるという学習活動も考えられます。(24ページも参照)

夏

<p>閑かさや 岩にしみいる 蝉の声</p> <p>(松尾芭蕉)</p>	<p>目には青葉 山ほととぎす 初鰹</p> <p>(山口素堂)</p>	<p>古文</p>
<p>山寺の静けさのなかで、蝉の声があたり の岩にしみ入るように響いている。 *閑かな境内、重なり合うような岩。複 数の蝉が同時に鳴いて、耳につくほど の激しさではなく、細く澄んだ声が、 重厚さを兼ね備えながら静かに響きわ たる。</p> <p>季語「蝉」</p>	<p>目には青葉の色、耳にはほととぎすの声、 口には初がつおの味、これが初夏の鎌倉(と いう場所)の風物だ。 *まぶしく光る木々の新緑(視覚)、響き 渡るほととぎすの声(聴覚)、新鮮な初 鰹の味(味覚)。 季語「青葉」 「山ほととぎす」 「初鰹」</p>	<p>現代語訳</p>

コラム12 「ほととぎす」・「鰹」と「蝉」

ほととぎす・鰹

- 山口素堂の俳句(「目には〜」)は、「かまくらにて」の前書があり、神奈川県にゆかりのあるものとして取り上げました。鎌倉は初鰹が名物であり、江戸の人は特に初鰹に愛着をもっていました。初夏の風物として、季語が三つ並んでいます。

蝉

- 松尾芭蕉の俳句(「閑かさや〜」)は、立石寺(りっしやくじ)で詠まれたものです。「奥の細道」に登場します。映像教材では立石寺の映像を取り上げています。
- 俳句の中の蝉が何ゼミなのかの論争がなされ、「ニイニイゼミ」であろうと言われています。映像教材は「ニイニイゼミ」の映像です。
- 動画や音声は次のWebページが参考になります。

◇YAHOO! きっず図鑑 「ニイニイゼミ」の動画・音声

<http://contents.kids.yahoo.co.jp/zukan/insects/card/0603.html>

- 次のような案を経て、この俳句は作られました。

初案「山寺や石にしみつく蝉の声」

再案「さびしさや岩にしみ込む蝉の声」



<p>このたびは ぬさもとりあへず手向山 もみぢのにしき神のまにまに (菅原道真)</p>	<p>名月を 取つてくれろと 泣く子かな (小林一茶)</p>	<p>古文</p>
<p>この度はこの旅に、(あわただしく 出発したものですから) 神に手向ける ぬさも用意できませんでした。(そこ で、) 手向山の(この美しい) もみぢ の錦をぬさとして手向けます。神の御 心のままに。(どうかお受けください。)</p>	<p>空に掛かる明るい十五夜の月の晩、 月を眺めながら幼い我が子を抱いてあ やしている、手を伸ばして、まるで あのお月様を取ってくれとねだるよう な仕草をして泣く。どうしたものやら 困ったことだが、そんな我が子がい そう愛しい。 ※「名月」は、中秋の名月。 ※一茶が溺愛した、まだ一歳になら ない「さと」を抱いて月を眺めた 時の句。さとと翌年夏に死亡。 季語「名月」</p>	<p>現代語訳</p>

<解説>

○菅原道真の和歌(「このたびは〜」)には、次のような「掛詞(懸詞)」が使われています。

- ・掛詞とは、同音異義を利用して、一語(語の一部であることもある)に二つ以上の意味をもたせたるもので、主に和歌などに用いられる修辞法の一つです。

(1) 「たび」

「この**旅**」と「この**度**」

(2) 「手向(山)」

「手向**ける**」と「手向**山**」(奈良市。「歌枕」。)

(3) 「とりあへず」

「ぬさも**取り敢へず**(=用意できず)」と「**取り敢へず**(=まずは)手向けます」

※掛詞を探したり、自分で作ったりすることで、古典や言葉に親しむ学習活動も考えられます。

○「ぬさ(幣)」とは、神に祈るときに捧げる供え物のことです。神に供え、または罪やけがれを祓うために捧げ持つものです。古くは麻や木綿(ゆう)などをそのまま使っていたようですが、その後は織った布や紙を細長く切って棒に付けて垂らすようになりました。旅行の時には、紙または絹を細かく切ったものを用い、道祖神にまき散らして手向けたようです。

○「まにまに」(随に)とは、そのままに(物事の成り行きに)任せるさまを意味する副詞で、「~まに」「~従って」「~につれて」というような意味になります。



<p>水仙や 寒き都の ここかしこ</p> <p>(与謝蕪村)</p>	<p>田子の浦に うち出でて見れば白妙の 富士の高嶺に雪は降りつつ</p> <p>(山部赤人)</p>	古文
<p>底冷えの厳しい冬の京都では、心を なぐさめてくれる花も見当たらず、何 となく物足りない感じではあるが、幸 いにあちらこちらに気品の高い清楚な 水仙の花が咲いていて、眼を楽しませ てくれる。</p> <p>*閑かな都の冬景色、日本水仙の色 と姿。</p> <p>季語「水仙」</p>	<p>田子の浦に出て眺めると、真っ白な 富士の高嶺に、雪がしきりに降り続け ているよ。</p> <p>*富士山の雄大な姿、富士山の雪景 色。</p> <p>※「田子の浦」は静岡県にある富士 が美しく見える場所として昔から 有名な場所。</p> <p>※浮世絵としては、葛飾北斎の「東 海道 江尻田子の浦略図」(富嶽三 十六景)がある。</p>	現代語訳

<解説>

○山部赤人の和歌(「田子の浦に〜」)

- ・「百人一首」に選ばれた和歌ですが、「万葉集」では次のようになっています。

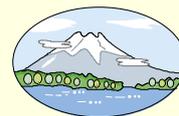
「田子の浦ゆ うち出でてみればま白にぞ 富士の高嶺に 雪は降りける」

<現代語訳> 田子の浦を通して出て(はるか遠くを) 見ると真っ白に、富士の高嶺に
雪が降っていることだ。

- ・「田子の浦」は、駿河の国の「歌枕」(和歌に詠まれる特定の地名や名所)です。
- ・「田子の浦」は、現在は静岡県富士市東部の駿河湾に面した海辺を指しますが、昔は山の陰で富士山が見えない旧庵原郡蒲原町(現静岡市清水区)吹上の浜を中心とする一帯を指しました。
- ・「万葉集」で使われている「ゆ」は、移動する動作の経由点を表す助詞で、「〜から」「〜を通して」という意味です。一方で、「百人一首」で使われている「に」は、動作の帰着点を表す助詞で、「〜に」という意味です。
- ・昔の「田子の浦」が富士山の見えない場所であることから、「ゆ」とした「万葉集」では、雄大で荘厳な実景が詠われています。一方で、「に」とした「百人一首」では、富士山は見えないこととなりますが、雪が降っている様子が描かれ、流麗な声調になっています。
- ・映像教材では、児童になじみのある七五調の「百人一首」を取り上げました。

取り上げた和歌以外にも、このような複数の形をもった和歌があります。

※「万葉集」と比べるとという学習活動も考えられます。



国語科 学習指導案 3 (チャプターⅡ-1)

1 単元名 和歌や俳句を知ろう (第3学年及び第4学年)

2 単元の目標

和歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読したり暗唱したり、文章等で表現したりすることを通して、古典に親しみ、言葉についての興味を深める。

3 単元の設定について

(1) 目標について

言葉を楽しむ遊びは、日本語の特質をとらえたものとして、言語文化に触れることができる良い機会でもある。例えば、しりとり、回文、しゃれ、なぞなぞ等が挙げられる。

児童は、普段意識せず、知らず知らずのうちに言葉遊びをして、言葉の面白さに親しんできていると思われる。そこで、新たな言葉遊びの一つとして、和歌や俳句の学習を取り入れ、リズムや表現の面白さを体験させ、古典に親しむ態度や伝統的な言語文化を大切にする態度をはぐくむことをねらいとした。

(2) 学習活動について

映像教材 (DVD) を視聴し、和歌や俳句を音読することを通して、児童になじみのある七五調や五七五のリズムを感じ取ったり、和歌や俳句の特徴に気付いたりさせるようにする。

また、分かりやすい和歌や俳句を選び、リズムや言葉から内容や情景を思い浮かべ、絵に描いたり、説明文を書いたりする活動を通して、古典に親しみながら、和歌や俳句の特徴や昔と今の相違点を知ることができるようにする。

4 単元の評価規準 (例)

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
友達の感想などを通し、感じ方や考えの違いや共通点に気付く、自分の読みを見直そうとしている。	読み取った内容について自分なりに感想や意見などをまとめている。	様子を表す語句や主語になる語句などに注意し、語句の役割を理解している。

☆本単元は、新学習指導要領の「読むこと」の(1)・オ「文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと。」や(2)・ア「物語や詩を読み、感想を述べ合うこと。」に関連します。

☆また、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の(1)・ア・(7)「易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。」に関連します。

5 単元の指導計画（3時間）

時間	学習内容 評価(方法)	学習活動 ◇教材 ・予想される反応	指導上の留意点 手だて ☆教材活用のヒント
1	○和歌や俳句の特徴を知る。	1 チャプターⅡに出てくる和歌や俳句の範読を聞き、聞いたことのあるものを挙げてみる。 2 和歌や俳句の特徴を考える。 ・短歌は五・七・五・七・七の三十一音、俳句は五・七・五の十七音からできている。 ・俳句には季節を表す言葉がある。 3 和歌や俳句を音読する。	☆チャプターⅡで出てきた和歌や俳句を切り取るなどして、プリントを用意する。 ・一覧表を用意して、書き込ませるようにする。 リズムが分からない児童には、線を引かせて、区切れを意識させるようにする。
2	○和歌や俳句を音読して、情景を想像し、その内容を文章等で表現する。 【知識・理解・技能】 様子を表す語句や主語になる語句などに注意し、語句の役割を理解している。(行動の観察)	1 自分が気に入った和歌や俳句を選び、ノートに書いて、音読する。 2 選んだ和歌や俳句について、想像したことを絵に描き、説明文を書く。 	なかなか選べない児童には、好きな季節から選ぶように伝える。 ・絵ではなく、イメージに合う写真を探したり、撮影したりしてもよいこととし、時間がたりない場合には、次の時間までに用意するように伝える。
3	○昔と今の違いを知る。 【興味・関心・態度】 友達の感想などを通し、感じ方や考えの違いや共通点に気付き、自分の読みを見直そうとしている。(発言の確認) 【読む能力】 読み取った内容について自分なりに感想や意見などをまとめている。(記述の分析)	1 描いた作品を発表する。 2 チャプターⅡを見て、自分の作品と比べてみる。 ◇映像教材 (DVD) 3 和歌や俳句の内容を知る。 4 自分の作品を書き直してみる。	・古語の詳細な説明にならないように注意する。 ☆映像教材を一時止めて、そのイメージ映像と自分の描いた絵や用意した写真とを比べさせる。 違いを表現できない児童には、気になる点を挙げさせるようにする。

6 本単元に関連して

和歌には、児童に親しみのある五七調の他に、七五調もあります。

※和歌によってリズムに違いがあることに気付かせる学習活動も考えられます。

コラム 13 「和歌」(「短歌」)、「俳諧」・「俳句」

和歌 ・「和歌」とは、「唐歌(からうた)」「漢詩」に対する日本(大和)の歌の意味です。「倭歌」とも書きます。また、「やまとうた」、「三十一文字」、「敷島の道」などとも言われます。

・「和歌」は、長歌・短歌・旋頭歌・片歌など、五音と七音を基調とする定型歌の総称です。

〔長歌〕五・七音を繰り返して、五・七・七音で終わり、^{はんか}反歌を伴ったものが基本的な形です。句数に制限はありません。「万葉集」に多く見られます。

*反歌…長歌の後に付けられた歌で「かえしうた」「みじかうた」等とも言います。ほとんどが短歌の形式です。

〔短歌〕五・七・五・七・七音の五句からなり、最初の三句を「上の句」、後の二句を「下の句」と呼びます。(短歌の成立には複数の説がありますが、長歌の末尾五句が独立したものとされています。)
「万葉集」以降、和歌の中心をなすものとして、現代に至るまで詠み継がれています。「万葉集」の他に、「古今和歌集」や「新古今和歌集」に多く見られます。

〔旋頭歌〕五・七・七・五・七・七音の六句からなります。

〔片歌〕五・七・七音の三句からなり、最も短い形式です。

・「古今和歌集」の「仮名序」(紀貫之)の冒頭に次のように記されています。

「やまとうたは、人の心を種として、^{よろづ}万の言の葉とぞなれにける。」

<現代語訳>やまたうたというものは、人の心という種が、様々な葉(言葉=和歌)となった(ものである。)

・和歌は短いため、それを補うように、「枕詞」、「掛詞」、「序詞」、「縁語」、「本歌取り」、「見立て」等の様々な技巧(修辞)が生まれました。

・なお、明治(和歌革新運動)以降、「和歌」は「短歌」という名称となり、「和歌」は古典の和歌を指すようになりました。

・「和歌」から派生したものとして、連歌・俳句・俳諧などがあります。

俳諧・俳句

・「俳諧」は「連歌」から派生したものです。「俳諧連歌」が生まれ、江戸時代になって「俳諧」が確立されました。

・「俳諧」は、長句(五・七・五)と短句(五・五)を付け連ねる連歌の形式を受け継ぎ、発端の長句(「発句」と呼ばれる)とそれに連なる連句からなります。

・なお、明治になると、発句が独立して「俳句」と呼ばれるようになりました。

・映像教材では、代表的な俳人(松尾芭蕉と与謝蕪村)を取り上げています。



国語科 学習指導案 4 (チャプターⅡ-2)

1 単元名 季節を身近に感じよう (第3学年及び第4学年)

2 単元の目標

和歌や俳句を音読したり暗唱したりしながら、季節を感じ取り、昔の人々と共通した季節への思いや感じ方を知ることを通して、古典に親しむ。

3 単元の設定について

(1) 目標について

児童にとって、「古典」は昔のもので、現代の自分とは全く別世界のものととらえてしまうことも考えられる。そこで本単元では、「季節」をテーマとして身近なものを通して、昔の人々と同じ思いを抱いていることに気付き、古典に親しみをもてるようにすることをねらいとした。

(2) 学習活動について

和歌や俳句は、言葉の短さやリズムなどから、児童には親しみのもてるものであると考える。特に、長文を読むのとは異なり短い言葉であることから、作者の感じたことを想像したり、言葉を繰り返し味わったりすることを通して、親しみをもちやすいものであると考える。

四季(春夏秋冬)に分けて、通年で行えると効果的であると見え、季節ごとに学習活動を展開できるようにした。

月の異名(1月～12月)、年中行事などとも関連が深いので、その都度、それらに触れることも可能である。季語や暦は、現代の季節や暦とのずれが生じるので、発達段階に応じて季節感を大切に場面と知識を大事にする場面を区別しながら進めるようにする。なお、近代短歌は、現代の季節感と合致するので、季節感を大切に場面では、近代短歌を取り上げることも考えられる。

4 単元の評価規準(例)

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
書く目的に照らして適切な表現となっているか確かめたり、さらに工夫したりしようとしている。	書くことのそれぞれの過程で自らのよさに気付いている。	国語辞典や漢字辞典の使い方を知り、必要に応じて活用している。

☆本単元は、新学習指導要領の「書くこと」の(1)・カ「書いたものを発表し合い、書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合うこと。」や(2)・ア「身近なこと、想像したことなどを基に、詩につくったり、物語を書いたりすること。」に関連します。

☆また、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の(1)・ア・(7)「易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。」に関連します。

5 単元の指導計画（3時間） ※「(四季の一つ)」には「春」、「夏」、「秋」、「冬」のいずれかの季節が入る。

時間	学習内容 評価(方法)	学習活動 ◇教材 ・予想される反応	指導上の留意点 手だて ☆教材活用のヒント
1	○考えたり、探したりして、季節を代表する風物を知る。	1 「(四季の一つ)」といえは何を思い浮かべるかを考え、思いつくものを挙げる。 2 チャプターⅡ（「(四季の一つ)」）を視聴する。 ◇映像教材（DVD） 3 和歌や俳句を音読し、好きな和歌や俳句を暗唱する。	・窓の外を見て、「(四季の一つ)」のイメージを広げさせるようにする。  ・情景や内容を想像しながら音読させるようする。
2	○和歌や俳句に込められた昔の人の気持ちを知る。 【関心・意欲・態度】書く目的に照らして適切な表現となっているか確かめたり、さらに工夫したりしようとしている。（行動の確認）	1 「(四季の一つ)」の風物を探し、短歌や俳句をつくる。 2 作品を発表する。（見付けた「(四季の一つ)」のものや、自分が感じたことを話してから作品を発表する。）	・形のある物だけではなく、感覚的なこと（音やにおい等）にも注意を向けさせるようにする。 作品がなかなかできない児童には、季節を決めることから始めるように伝える。
3	○季節を感じる風物には、昔の人と現代の自分とに共通点や相違点があることを知る。 【書く能力】書くことのそれぞれの過程で自らのよさに気付いている。（記述の分析） 【知識・理解・技能】国語辞典や漢字辞典の使い方を知り、必要に応じて活用している。（行動の観察）	1 チャプターⅡ（「(四季の一つ)」）を視聴する。 ◇映像教材（DVD） 2 和歌や俳句の意味を知る。 3 前後1か月程度のカレンダーに、二十四節気の該当部分を記入する。 ◇二十四節気の表 4 第2時に探した「(四季の一つ)」のものや各自が作った短歌や俳句、二十四節気の表などを用いて、グループで一つの二十四節気を作ってみる。 5 実際の二十四節気と比べてみる。	・古語の詳細な説明にならないように注意し、和歌や俳句に表れた昔と今との違いや共通点に気付かせるようにする。 ☆映像教材の中で、現代との共通点に触れている子どもの発言を取り上げるようにする。 二十四節気には当てはめる言葉がなかなか決まらない場合には、自分たちが見付けたものや作った和歌や俳句の中から選ぶようにさせる。 ・言葉を選ぶ際には、国語辞典や漢字辞典で言葉の意味を確認させる。 ・二十四節気と比較することで、昔の人々も現代の自分たちも同じような思いで季節を感じていることに気付かせる。

6 本単元に関連して

季節を感じるものは、見て分かる物だけでないことに気付かせるようにします。

- 例) 聴覚…鳴き声や音 (鳥や虫の声、風の音、祭囃子^{はやし} 等)
 嗅覚…香りや匂い (花の香り、食べ物の匂い 等)
 味覚…食べ物の味 (匂や行事の際の食べ物…七草がゆ、初鯉 等)
 触覚…触り心地や温度 (水温^{ぬる}む、風冷たく 等)

※色を表す言葉を通して、昔の人がどのように風物や季節をとらえていたかを感じ取らせる学習活動も考えられます。

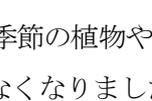
※生活科 (朝顔で絵を描く、染める)、図画工作 (色作り、三原色) と関連させる学習活動、理科 (気温、植物、生き物) と関連させた年間を通じた学習活動も考えられます。

「百人一首」や和歌集の中にも、季節を感じるができます。

- 例) 「百人一首」 春…6首 夏…4首 秋…16首 冬…6首 桜…5首 月…13首
 「古今和歌集」の部立 (分類) の中に春 (上下巻)・夏・秋 (上下巻)・冬があります。
 「歳時記」 (季語の説明やその季語を使用した俳句の紹介等が載っています。)

コラム14 「二十四節気」

- ・「二十四節気」とは、太陰太陽暦で、日付と季節との関係の変動 (ずれ) を調整するために設けられ、黄道上に二十四の分点を設け、一月に二分点ずつ割り当てたものです。

[春] 1月: 立春 (2月4日頃)、雨水 (2月19日頃)	* () 内は太陽暦の日付
2月: 啓蟄 (3月6日頃)、春分 (3月21日頃)	
3月: 清明 (4月5日頃)、穀雨 (4月20日頃)	
[夏] 4月: 立夏 (5月6日頃)、小満 (5月20日頃)	
5月: 芒種 (6月5日頃)、夏至 (6月22日頃)	
6月: 小暑 (7月7日頃)、大暑 (7月23日頃)	
[秋] 7月: 立秋 (8月8日頃)、処暑 (8月23日頃)	
8月: 白露 (9月8日頃)、秋分 (9月23日頃)	
9月: 寒露 (10月8日頃)、霜降 (10月23日頃)	
[冬] 10月: 立冬 (11月7日頃)、小雪 (11月23日頃)	
11月: 大雪 (12月9日頃)、冬至 (12月22日頃)	
12月: 小寒 (1月6日頃)、大寒 (1月21日頃)	

- ・「七十二候」とは、節気をさらに3等分したもので、名称から季節の植物や動物を感じるができますが、現在では「半夏生」^{はんげしょう}以外はほとんど聞かなくなりました。

- ・二十四節気の他に、季節の目安となるものとして、「雑節」があります。

- [春] 彼岸 (春分を中心に7日間)、土用 (立夏前約18日間)、八十八夜 (5月2日頃)
 [夏] 入梅^{にゅうばい} (6月11日頃)、半夏生 (7月2日頃)、土用 (立秋前約18日間)
 [秋] 二百十日 (立春から210日目、9月1日頃)、彼岸 (秋分を中心に7日間)、
 土用 (立冬前約18日間)
 [冬] 土用 (立春前約18日間)、節分 (立春の前)

<季節の和歌や俳句（例）> ◎は月に関するもの

<春>

- ◎東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ（柿本人麻呂）
- ◎照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき（大江千里）
- 春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草に日の入る夕（北原白秋）
- 山路来て何やらゆかしすみれ草（松尾芭蕉）
- ◎菜の花や月は東に日は西に（与謝蕪村）
- 春の海ひねもすのたりのたりかな（与謝蕪村）
- 雀の子そこのけそこのけお馬が通る（小林一茶）
- ◎外にも出よ触るるばかりに春の月（中村汀女）

<夏>

- ◎夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ（清原深養父）
- ◎ほととぎす鳴きつる方をながむればただありあけの月ぞ残れる（藤原定実）
- 鶺鴒舟高瀬さしこすほどなれや結ばほれゆくかがり火のかげ（寂蓮）
- 道のべに清水ながるる柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ（西行）
- 向日葵は金の油を身にあびてゆらりと高し日のちひささよ（前田夕暮）
- 夏草や兵どもが夢の跡（松尾芭蕉）
- 夏河を越すうれしさよ手に草履（与謝蕪村）
- ひつばれる糸まつすぐや甲虫（高野素十）
- やはらかに金魚は網にさからひぬ（中村汀女）

<秋>

- ◎天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも（安倍仲磨）〔羈旅〕
- ◎わたつみの豊旗雲に入日さし今夜の月夜さやけかりこそ（天智天皇）
- ◎月見ればちぢにもものこそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど（大江千里）
- 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる（藤原敏行）
- さびしさはその色としもなかりけりまき立つ山の秋の夕暮（寂蓮）
- 心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮（西行）
- 見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮（藤原定家）
- 秋深き隣は何をする人ぞ（松尾芭蕉）
- 柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺（正岡子規）
- をりとりてはらりとおもきすすきかな（飯田蛇笏）

<冬>

- 駒とめて袖うち払ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮れ（藤原定家）
- ◎志賀の浦やとほざかりゆく浪間よりこほりていづる有あけの月（藤原家隆）
- ◎みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ（島木赤彦）
- 最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりけるかも（斎藤茂吉）
- むまそうな雪がふうはりふはりかな（小林一茶）
- 幾たびも雪の深さを尋ねけり（正岡子規）
- 遠山に日の当たりたる枯野かな（高浜虚子）
- 梅一輪一輪ほどのあたたかさ（服部嵐雪）

等

チャプターⅢ（生活）

チャプターⅢは、言葉を通して伝えられる昔の人の生活の知恵を「古典」として知り、古典（特に言葉）に親しむことをねらいとしています。

【テーマについて】

チャプターⅢで取り上げたテーマは「生活」です。「古典」というものは昔のことで、現代とはかわりのないものであるということではなく、昔の人のものの見方や感じ方が現代にも受け継がれていることを知るために、身近なものとして「生活」というテーマを設定しました。

言葉を通して伝えられる昔の人の知恵に触れることができるように、「七草がゆ」として今も残る「春の七草」、それと対になり眺めて楽しむ「秋の七草」を映像にしました。

<p>朝顔の花 女 郎 花 撫 子 の 花 萩 の 花 尾 花 葛 花</p> <p>また藤袴</p> <p>（山上憶良）</p>	<p>七種の花 指 折 り か き 数 ふ れ ば</p> <p>（山上憶良）</p>	<p>秋の野に 咲きたる花を</p>	<p>秋の七草</p>	<p>春の七草</p> <p>せり なずな ごぎょう はこべら すずな すずしろ</p> <p>ほとけのざ</p>
---	---	------------------------	-------------	---

コラム 15 七種（七草）

春 ・現在の七草は、「河海抄」（四辻善成著、室町時代、「源氏物語」の注釈書）に登場します。これに、「これぞ七草」と付けた次のような和歌（作者未詳）が後に作られ、現在に残っています。

和歌：「せり なずな ごぎょう はこべら ほとけのざ すずな すずしろ
これぞ七草」



・なお、「ほとけのざ」は、現在の「ホトケノザ」ではなく、「タビラコ」のことです。
「すずな」は大根、「すずしろ」は蕪のことです。
「ごぎょう」はハハコグサ、「はこべら」はハコベの通称です。



秋 ・山上憶良の和歌は「万葉集」に登場します。（五七調）

・「朝顔」は、現在の「アサガオ」ではなく、「キキョウ」のことです。
「尾花」はススキのことです。



【ジャンルについて】

チャプターⅢで取り上げるジャンルは、「散文」・「韻文」以外のもの（「言葉」）としました。「言葉」としては、ことわざや慣用句、故事成語などが挙げられます。短い言葉やリズムで、児童が親しみやすいものでもあります。

映像教材では、「春の七草」と「秋の七草」を取り上げました。どちらも和歌として、チャプターⅡとも関連をもたせました。

映像教材に登場する青果店の店主のせりふには、言葉を通して伝えられる昔の人の知恵に触れた、次のようなものがあります。

店主「一月七日の朝に七草がゆを食べると、一年中病気にならないって言われてるんだよ。だから『今年も家族みんなが元気で過ごせますように』って願って、昔から食べられてきたんだよ。」

店主「七種類あって、たたいて細かくしておかゆに入れて食べるんだよ。おかゆを作るときに歌う歌もあるんだよ。」

コラム 16 「七草がゆ」

粥 ・ 1月7日に、七種類の菜を入れた粥（七草粥）を食べる行事で、中国から奈良時代に伝来し、現在の形で一般に定着したのは江戸時代だと言われています。全国的に行われていますが、地域によって入れる菜に違いがあります。

・そのいわれも地域によって異なりますが、映像教材の中のせりふのように、「七草がゆを食べると一年中の病気を防ぐことができる」というのは共通しているようです。年の初めに若菜から新しい生命力をもらう、お正月のご馳走に疲れた胃腸をいたわる、青菜の不足しがちな冬場に栄養を補給するなどの意味もあります。

・なお、「七種粥」としては、七種類のものを入れた粥として、15日に食べる「小豆がゆ」を指すこともあります。神奈川県では、「七草がゆ」と「小豆がゆ」の両方を食べるようです。



歌 ・ 6日の夜や7日の朝に、「七草なずな～」というように、七草の葉を包丁で刻む際に唱える歌（囃子）がありますが、地域によって多少異なります。

・落語にも「七草」という話があります。

映像教材に登場する子どものせりふにも、言葉を通して伝えられる昔の人の知恵に触れた、次のようなものがあります。

子ども「おせち料理食べた？」

子ども「食べた、食べた。黒豆、だて巻き、栗きんとん。」

おせち料理の「豆」には、一年間マメに働くことができるようにとの意味が込められています。他にも、「ごまめ」（田作り）、「昆布」、「かち栗」など、言葉に掛けた食べ物があります。



国語科 学習指導案 5 (チャプターⅢ-1)

1 単元名 ことわざに親しもう (第3学年及び第4学年)

2 単元の目標

長い間使われてきたことわざの意味を知り、実際の生活の中で使う。

3 単元の設定について

(1) 目標について

伝統的な言語文化の一つであることわざや慣用句、故事成語を取り上げ、文語のリズムに親しみ、昔の人々の知恵に触れ、継承・発展させる態度をはぐくむとともに、意味や語源を知り、実生活の中で活用できるようにすることをねらいとした。

(2) 学習活動について

「春の七草」と「秋の七草」を音読して、文語のリズムに親しませるとともに、現代の生活に残る昔の人々の知恵について、言語を通して学ぶ機会とする。さらに、日本の年中行事の中でも節目となるお正月は、伝統的な言語文化に接する良い機会であることから、お正月という時期をいかし、百人一首や「いろはがるた」に触れ、簡単な意味をとらえ、楽しみながら文語のリズムに親しませる。

その後、ことわざや慣用句、故事成語について調べ、実際に使ってみることで、今なお生活の中に息づく古典を実感させ、継承・発展させる気持ちをもてるようにさせるとともに、実生活の中で使えるようにさせる。

4 単元の評価規準 (例)

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
話し合うことを通じて、自分の読みを見つめ直そうとしている。	疑問に思ったことに基づいて調べたりまとめたりするとき、大切なところの細部に注意して細かく読んでいる。	国語辞典や漢字辞典などの辞典の使い方を知り、必要に応じて活用している。

☆本単元は、新学習指導要領の「読むこと」の(1)・カ「目的に応じて、いろいろな本や文章を選んで読むこと。」や(2)・オ「必要な情報を得るために、読んだ内容に関連した他の本や文章などを読むこと。」に関連します。

☆また、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の(1)・ア・(イ)「長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。」に関連します。

5 単元の指導計画（3時間）

時間	学習内容 評価(方法)	学習活動 ◇教材 ・予想される反応	指導上の留意点 手だて ☆教材活用のヒント
1	<p>○「春の七草」、「秋の七草」について知る。</p>	<p>1 お正月の過ごし方や代表的な食べ物（おせち料理など）について知っていることを挙げる。</p> <p>2 チャプターⅢを視聴する。 ◇映像教材（DVD）</p> <p>3 「七草がゆ」について分かったことをノートに書く。</p> <p>4 「春の七草」、「秋の七草」を音読し、暗唱する。</p> <p>5 お正月の遊びとして、「百人一首」や「いろはがるた」について知る。</p> <p>6 実際にかるた取りを行う。</p>	<p>☆映像教材(字幕あり)の説明の場面で映像を止め、確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リズムを感じ取らせ、味わうようにさせる。 ・「いろはがるた」には、現代の生活の中ではなじみのないものも多いため、意味については深く触れず、リズムに親しませるようにする。
2	<p>○言葉を通して昔の人々の知恵が現代に伝えられていることを知る。</p> <p>【知識・理解・技能】国語辞典や漢字辞典などの辞典の使い方を知り、必要に応じて活用している。(記述の点検)</p> <p>【読む能力】疑問に思ったことに基づいて調べたりまとめたりするとき、大切などころの細部に注意して細かく読んでいる。(記述の分析)</p>	<p>1 ことわざや慣用句、故事成語について調べる。</p> <p>2 調べたことわざや慣用句、故事成語についての紹介文を作る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館を活用し、ことわざ等を調べさせ、実際の生活の中で使えるように、短文を作らせる。 <p>なかなか紹介文が作れない児童には、ことわざ等を使った例文(短い文)から作らせるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時間がたりない場合には、調べておくように伝える。
3	<p>○いろいろなことわざや慣用句、故事成語があることを知る。</p> <p>【関心・意欲・態度】話し合うことを通じて、自分の読みを見つめ直すとしている。(行動の観察)</p>	<p>1 調べたことわざや慣用句、故事成語について発表する。</p> <p>2 ことわざや慣用句、故事成語を使って、話し合いながら、グループで一つのかるたを作成する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・調べたことわざ等に親しませるため、かるたを作成させる。 ・絵札と読み札、それぞれについても分担して、作れるところから作るようにさせる。



6 本単元に関連して

調べたことわざや慣用句、故事成語について、短文を作るなどして、実際に使えるようにします。

☆参考資料

『ことわざ絵本』、『ことわざ絵本 PART-2』 五味太郎 岩崎書店（1986年、1987年）

- ・ことわざの意味が絵と文で描かれていて、児童にも理解しやすい内容になっています。創作ことわざも載っています。

『故事ことわざ・慣用句辞典』三省堂編修所 三省堂（1999年 改訂）

- ・ことわざ、故事成語、慣用句を収録。故事成語には書き下し文、慣用句には用例があります。東西いろはがるた一覧、英語のことわざ等も載っています。



等

コラム17 かるた

百人一首

- ・「百人一首」とは、百人の優れた歌人の歌を一首ずつ選んだ歌集の意味です。一般的には、江戸時代に成立した歌がるたを指します。和歌は様々な古典から選ばれていました。
- ・歌がるたは、平安貴族の遊びであった貝合や貝覆から、江戸時代初期に歌貝（貝の一方に和歌の上の句、他方に下の句を書いて合わせる遊び）が生まれ、西洋カルタの影響を受けて、厚紙に書く形になりました。
- ・「小倉百人一首」は、藤原定家の京都小倉山の山荘のふすまの色紙に歌が書き付けられていたことから生まれた名称です。撰者には諸説があります。
- ・「古今和歌集」から「続後撰和歌集」までの10の勅撰和歌集によります。



いろはがるた

- ・「いろはがるた」は、「いろは歌」による絵がるたです。江戸系、京系、大阪系などの種類があります（「江戸かるた」、「上方かるた」、「尾張かるた」等）。なお、内容が難解であったり、現在では表現に問題があったりするなどとして、一部表現が書き換えられたりしています。
- ・現在でも地域の特色を生かした「いろはがるた」が作られています。（「上毛かるた」、「海老名いろはがるた」等）
- ・「いろは歌」とは、平仮名47文字を一回ずつ使い、七五調四句の今様歌につくったもので、10世紀末から11世紀前半にかけて成立したもの（作者未詳）です。末尾に「ん」または「京」を付すこともあります。

「いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむうののおくやまけふこえて
あさきゆめみしゑひもせす」

（「色は匂へど散りぬるを我が世たれぞ常ならむ有為の奥山今日越えて浅き夢見じ
酔ひもせず」

国語科 学習指導案 6 (チャプターⅢ-2)

1 単元名 日本を調べよう (第3学年及び第4学年)

2 単元の目標

古くから歌い継がれている童謡や唱歌等を通して、五音七音のリズムや文語の調子を味わう。
また、春夏秋冬の風物を追いながら、日本の昔からの季節の見方や感じ方を知る。

3 単元の設定について

(1) 目標について

一年間を通じて様々なものがあふれた現代生活は、季節の変化に乏しく、一方でハロウィンやクリスマスなどのように外国に端を発した行事が一般的になっている。

日本には古来、自然の機微の移り変わりを楽しみ、季節の到来を喜び感謝する豊かな感性やそれによる言語文化が伝えられてきている。それは、行事、童謡や唱歌等にもあらわれている。児童に四季の変化を感じさせ、季節の風物を理解させることで、豊かな感性をはぐくむとともに、古典への理解や親しみにつながると考える。

季節の風物やその感じ方を歌詞にした童謡や唱歌などを通して、日本の伝統的な言語に触れさせ、我が国の言語文化を受け継ぎ、新たな創造へとつなげていく態度をはぐくむことをねらいとした。

(2) 学習活動について

昔から歌い継がれてきた童謡や唱歌には、季節が豊かに歌われ、日本語の美しい響きがある。五音七音のリズムや文語もあり、メロディに合わせて口ずさむこともできるため、児童にとっては親しみやすい教材でもある。また、ことわざや慣用句、故事成語に関する歌詞もある。歌詞を通じて、昔の人の四季を愛でる感性や知恵に触れることができる教材である。

どのような歌があるのか、どのようなときに歌われたのか、どのような意味なのかについて、季節を区切って、年間を通して調べる学習を行う。

4 単元の評価規準 (例)

国語への関心・意欲・態度	話す・聞く能力	言語についての知識・理解・技能
最も伝えたい中心をどこに位置付けるか考えて話そうとしている。	相手や目的に応じて、まとまりをもった話の構成で説明している。	主語や述語、修飾語になる語句を正しく用いながら話している。

☆本単元では、新学習指導要領の「話すこと・聞くこと」の(1)・ア「関心のあることなどから話題を決め、必要な事柄について調べ、要点をメモすること。」や(2)・ア「出来事の説明や調査の報告をしたり、それらを聞いて意見を述べたりすること。」に関連します。

☆また、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の(1)・ア・(イ)「長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。」に関連します。

5 単元の指導計画（3時間）

時間	学習内容 評価(方法)	学習活動 ◇教材 ・予想される反応	指導上の留意点 手だて ☆教材活用のヒント
1	<p>○「春の七草」、「秋の七草」について知る。</p> <p>○正月の風物について知る。</p> <p>○正月の歌を知る。</p>	<p>1 チャプターⅢを視聴する。 ◇映像教材（DVD）</p> <p>2 「七草がゆ」について知る。</p> <p>3 七草について音読する。</p> <p>4 学習課題を確認する。</p> <p>5 一月の風物について、知っていることを挙げる。 ◇正月風景の写真や映像</p> <p>6 一月に歌われる歌はないかを考える。</p> <p>7 「お正月」、「一月一日」の歌を音読し、意味を考える。 ◇歌の歌詞</p> <p>8 みんなで歌う。</p> <p>9 次の時間までの課題を確認する。</p>	<p>・五音七音の調子を感じ取らせる。 ☆映像教材を繰り返し視聴することで、区切りをつかませる。</p> <p>区切りが分からない児童には、一音ずつ数えさせる。</p> <p>☆映像教材に登場するお正月の食べ物について説明する。</p> <p>・これから数時間にわたる学習課題（1月～12月までの季節の風物や行事、歌について調べること）を伝える。</p> <p>・風物や歌が書き込める1年間の一覧表を用意しておく。</p> <p>・五音七音の調子を感じ取らせる。</p> <p>・歌詞の説明を加える。</p> <p>・二月以降の季節の風物について、次の時間までに調べてくるように伝える。（二月以降は、季節を区切って、数時間に分けて行う。）</p>
2	<p>○二月以降の風物や歌について知る。</p> <p>【関心・意欲・態度】 最も伝えたい中心をどこに位置付けるか考えて話そうとしている。（記述の確認）</p>	<p>1 季節を追って、調べた風物を挙げていく。 ◇行事や風物の写真 ◇行事や風物の本 等</p> <p>2 次の時間までの課題を確認する。</p>	<p>・一覧表を用意しておき、児童から出てきた風物や歌等について書き込んでいく。</p> <p>・主な行事については写真を用意し、その都度提示できるようにする。</p> <p>・季節の移り変わりの中でいろいろな行事を行い、喜びを味わってきたことを理解させる。</p> <p>・歌について、次の時間までに調べてくるように伝える。その際には、書籍だけでなく、聞き取りやインタビューを通して調べるように伝える。</p> <p>・発表する内容については、最も伝えたい中心を明確にして、あらかじめノートに書いておくように伝える。</p>
3	<p>○いろいろな季節の歌があることやその歌に込められた昔の人の思いについて知る。</p> <p>○文語の特徴を知る。</p> <p>【知識・理解・技能】 主語や述語、修飾語になる語句を正しく用いながら話している。（発言の確認）</p>	<p>1 調べた歌について、発表する。発表を聞いて、質問をしたり意見を述べたりする。</p> <p>2 歌の意味（情景や歌に込められた思い）を確かめながら、声に出して歌詞を読む。</p> <p>3 歌の意味が伝わるように歌ってみる。</p> <p>【話す・聞く能力】相手や目的に応じて、まとまりをもった話の構成で説明している。（発言の分析）</p>	<p>・児童が調べた歌の中から幾つかを取り上げ、歌詞を例示する。</p> <p>・五音七音や文語の調子を感じ取らせるようにする。</p> <p>・音読と一緒に歌詞の内容を説明する。</p> <p>・必要に応じて、写真や絵を提示する。</p>



6 本単元に関連して



現代の生活の中に残る年中行事が、形を変えながらも昔から続いているものであることをとらえさせ、昔の人のものの見方や考え方について考えられるようにします。

例) 1月：元日、七草、鏡開き、小正月 2月：節分 3月：雛祭り（桃の節句）、彼岸
4月：花祭り 5月：端午の節句 6月：衣替え、夏至
7月：七夕、土用 8月：立秋、お盆(旧盆) 9月：中秋のお月見、重陽の節句、彼岸
10月：衣替え 11月：七五三 12月：冬至、大晦日 等

※チャプターⅡを視聴させ、季節の風物を取り上げる学習活動も考えられます。

※年中行事に関係する童謡や唱歌を取り上げることで、音楽と関連させることも可能です。

☆参考資料

『教科書にでている童謡・唱歌のふるさと』全3巻

大賀寛監修・著、吉村温子著 岩波書店（2006年）等

<取り上げる歌（例）>

お正月、一月一日、うれしいひなまつり、春が来た、さくらさくら、春の小川、花、ひらいたひらいた、まきばの朝、ふじ山、せいくらべ、こいのぼり、かたつむり、箱根八里、茶つみ、港、夏は来ぬ、たなばたさま、われは海の子、海、ほたるこい、荒城の月、おぼろ月夜、つき、うさぎ、ふるさと、赤とんぼ、もみじ、とんび、虫の声、夕やけ小やけ、冬げしき、スキーの歌、越天楽今様、蛍の光、揚げば尊し 等

コラム 18 年中行事

- ・「年中行事」（毎年一定の時に慣例として行われる儀式）は、農耕儀礼に由来するもの、月齢、重日（5月5日、7月7日など奇数の重なる月日）、十干十二支によるものなど様々です。宗教に関係する行事もあります。古典の中には、様々な年中行事が登場します。
- ・「七草がゆ」にも関連する正月七日は、「五節句（五節供）」の一つです。五節句は、一年に五度ある節句のことで、現在でも民間行事として行われています。「節句（節供）」とは、季節の変わり目の祝いをする日で、その日に備える食べ物のことを指すこともあります。五節句は次のとおりです。

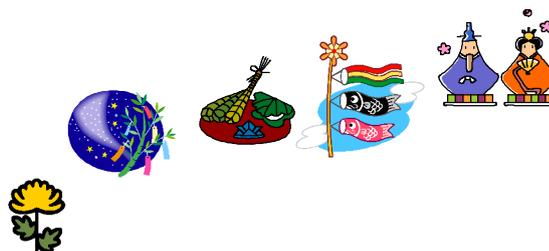
正月七日（人日、七草がゆ）

三月三日（上巳、草餅）

五月五日（端午、粽）

七月七日（七夕、索餅）

九月九日（重陽、栗飯・菊酒）

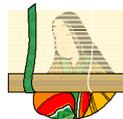


第3章 映像教材に関連した古典素材と活用案

1 映像教材に関連した古典素材

映像教材（DVD）に関連して、教材として授業で活用できる古典素材を紹介します。

（〈 〉には、関連する映像教材のテーマやジャンルを記載）

素材	ねらい（想定学年）等
< 散文 > 「徒然草」 ・ 第二百四十三段（八つになりし年） 「枕草子」 ・ 第百五十一段（うつくしきもの）	○自分の年齢と近い子どもが出てくる古典を読むことを通して、古典に親しむとともに、興味をもって色々な作品を読もうとする態度をはぐくむ。（中学年～高学年） ※この他にも、児童に近い年齢の子どもが出てくるものとして、「宇治拾遺物語」などの中世以降の説話を中心に取り上げることが考えられる。
< 散文 > 「東海道中膝栗毛」（小田原宿） 歌舞伎 落語	○文語の文章を味わい、内容の大体を知り、古文に親しむとともに、文学作品や伝統芸能を調べてみようとする態度をはぐくむ。（高学年） ※音楽（「箱根八里」等）と関連させたり、図画工作（安藤広重の浮世絵等）と関連させたり、社会（県名）と関連させたりする学習活動も考えられる。 ※落語に関連させて、怪談を取り上げることも考えられる。また、落語については、昔の生活について考える教材としても活用できる。
< 散文 > 「伊勢物語」 ・ 第九段（東下り）	○古文を音読し、古文を書き換えて、物語を作ることで、古典への理解を深め、古典に親しむ。（中学年～高学年） ☆「活用案1」として、42ページを参照
< 散文、季節 > 「枕草子」 ・ 第一段（「春はあけぼの」） ・ ものづくし（第百五十一段 等）	○古文を音読し、古文を書き換えて、自分なりの随筆を作ることで、古典への理解を深め、古典に親しむ。（中学年～高学年） 
< 月、韻文 > 月に関する和歌や漢詩 等	○月に関する和歌と漢詩を通して、日本の和歌との共通点を知り、現代との相違点や共通点を考える。（高学年） ☆「活用案2」として、42ページを参照
< 散文、生活・言葉 > 「外郎売りの科白（せりふ）」	○日本の古典芸能に触れ、話芸の魅力に気付き、言葉の響きを楽しむ。（高学年） ☆「活用案3」として、43ページを参照

素材	ねらい (想定学年) 等
<p>< 散文、言葉 > 「伊勢物語」 ・第九段（「から衣きつつなれにし つましあればはるばるきぬるた びをしぞ思ふ」） 「徒然草」 ・第六十二段（「ふたつもじ牛の角 もじすぐなもじゆがみもじとぞ 君はおぼゆる」） 等</p>	<p>○古典の中の言葉遊び（「折り句」、なぞなぞ等）を知り、実際に 作ってみることで、古典に親しむ。（中学年～高学年） ※「折り句」とは、和歌や俳句等の各句の初め（ないしは末尾） に、物名（もののな）などを一字（一音）ずつ詠み入れたもの のこと。 例) から衣 → か きつつなれにし → き つましあれば → つ はるばるきぬる → は（ば） たびをしぞ思ふ → た ※「徒然草」第六十二段の例は、「ふたつもじ」は「こ」、「牛の角 もじ」は「い」、「す（直）ぐなもじ」は「し」、「ゆがみもじ」 は「く」のことで、「こいしく」を意味し、「恋しく」となる。</p>
<p>< 韻文、言葉 > ・「心なき身にもあはれは知られけり 嶋立つ沢の秋の夕暮れ」（西行） ・「蛤にはしをしつかとはさまれて鳴 立ちかぬる秋の夕暮」（宿屋飯盛） ・「漁夫の利」（劉向「戦国策」）</p>	<p>○和歌や俳句のリズムに触れ、季節や風情、思いを感じ取る。 ○宿屋の和歌を例に挙げて、和歌や俳句の一部を書き換えて、自 分なりの和歌や俳句を作ってみることで、古典に親しむ。（中学 年～高学年） ※和歌に関する故事成語を調べてみる学習活動につなげることも 考えられる。</p>
<p>< 韻文・季節、言葉 > 漢詩 ・鹿柴 ・春暁 ・静夜思 ・絶句 等</p>	<p>○漢詩のリズムを味わい、現代に伝わる故事成語等（「少年易老学 難成」、「値（価）千金」等）について知る。（高学年） ※漢詩の紹介文を書くという学習活動も考えられる。 ※漢詩に関連する古文（「枕草子」等）を取り上げて、日本への影 響を知るといふ学習活動につなげることも考えられる。</p>
<p>< 季節、生活・言葉 > ・新年の広告 ・年賀状、暑中見舞い・残暑見舞い 等</p>	<p>○年賀状や新年の広告から年頭の挨拶を探したり、暑中見舞いや 残暑見舞いの時期を考えさせたりすることで、季節のずれに気 付くとともに、生活に今も残る行事や言葉を知り、古典に親し む。（中学年） ※年賀状から、十二支や古時刻（午前、午後、丑三つ時など）に ついて知る学習につなげることも考えられる。 ☆十二支や古時刻については、14 ページ（コラム6）を参 照 ※映画や小説の中に出てくる登場人物の名前等から、月の異名（1 月～12月）や季節を知る学習活動につなげることも考えられる。</p>
<p>< 生活・言葉 > ・食に関することわざ 等</p>	<p>○食に関することわざ等がどのような意味で使われているかを理 解することを通して、昔の人の知恵に触れるとともに、適切に 使えるようにする。（中学年） ☆「活用案4」として、43 ページを参照</p>
<p>< 生活・言葉 > ・昔話 ・童謡や唱歌 ・地図 ・観光パンフレット</p>	<p>○古典の舞台になっている、大和・摂津・武蔵などの旧国名を通 して古典に親しみ、それぞれの風土を知る。（中学年） ☆「活用案5」として、44 ページを参照</p>

2 映像教材に関連した古典素材の活用案

映像教材（DVD）に関連して、教材として授業で活用できる古典素材（40～41 ページ）の活用案を紹介します。

活用案 1

学年	中学年～高学年（書くこと、伝統的な言語文化）
単元の目標 (時間)	○古文を音読し、古文を書き換えて、物語を作ることで、古典への理解を深め、古典に親しむ。（3～4時間）
教材	「伊勢物語」第九段
	主な学習活動
授業展開 (例)	<p>①古文を音読する。現代語訳を読み、書かれている内容を理解する。</p> <p>②自分が物語の登場人物になったつもりで、冒頭部分のア～オに当てはまる言葉を書き入れ、続きを加えて、新たな物語を作る。</p> <p style="padding-left: 2em;">＜冒頭部分＞</p> <p style="padding-left: 2em;">「昔、（ア：名前）がいた。その（イ：性別）が、（ウ：旅立ちの理由）とあって、（エ：場所）にはいるまい、（オ：場所）に住む国を求めようと思って出かけて行った。」</p> <p>③書いた文章を見せ合い、意見を述べ合う。</p> <p>④物語を書き直す。</p>

活用案 2

学年	高学年（読むこと、伝統的な言語文化）
単元の目標 (時間)	○月に関する和歌と漢詩を通して、日本の和歌との共通点を知り、現代との相違点や共通点を考える。（3時間）
教材	<p>○漢詩：「八月十五日夜禁中独直对月憶元九」（白居易）</p> <p>○漢詩：静夜思（李白）</p> <p>○和歌[詞書]八月十五夜（藤原雅正）</p> <p style="padding-left: 2em;">「いっとても月見ぬ秋はなきものをわきてこよひのめづらしきかな（後撰集）」</p> <p style="text-align: right;">等</p>
	主な学習活動
授業展開 (例)	<p>①漢詩を音読する。内容の大体を理解する。</p> <p>②月を見て友を思う気持ちを詠んだ漢詩を通して、月を思う気持ちや月に思いをはせる昔の人と自分との相違点や共通点を考える。</p> <p>③月をテーマとした和歌や漢詩を比較し、月に対する思いについて、相違点や共通点を考える。</p>



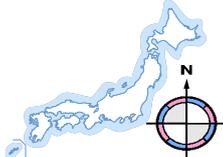
活用例3

学年	高学年（読むこと、伝統的な言語文化）
単元の目標 （時間）	○日本の古典芸能に触れ、話芸の魅力に気付き、言葉の響きを楽しむ。（3時間）
教材	「外郎売りの科白（せりふ）」 歌舞伎の映像
	主な学習活動（※指導上の留意点）
授 業 展 開 (例)	<p>①早口言葉を知る。歌舞伎を視聴する。現代語訳を読んで、内容を知る。</p> <p>「拙者親方(せっしゃおやかた)と申(もう)すは、お立合(たちあい)の中(うち)に、御存(ごぞん)じのお方(かた)もござりましようが、お江戸(えど)を発(た)って二十里上方(にじゅうりかみがた)、相州小田原一色町(そうしゅうおだわらいっしきまち)をお過(す)ぎなされて、青物町(あおもものちょう)に登(のぼ)りへおいでなさるれば、欄干橋虎屋藤衛門(らんかんばしとらやとうえもん) 只今(ただいま)は剃髪致(ていはついた)して、円斎(えんさい)となのります。元朝(がんちょう)より大晦日(おおつごもり)まで、お手(て)に入(い)れまするこの菓(くすり)は、～」</p> <p>「心得(こころえ)たんぼの川崎(かわさき)、神奈川(かながわ)、程ヶ谷(ほどがや)、戸塚(とつか)を、走(は)しって行けば、やいとを摺(す)りむく、三里(さんり)ばかりか、藤沢(ふじさわ)、平塚(ひらつか)、大磯(おおいそ)がしや、小磯(こいそ)の宿(しゆく)を七(なな)つ起(お)きして、早天早々(そうてんそうそう)、相州小田原(そうしゅうおだわら)とうちん香(こう)～」等</p> <p>②科白を音読する。グループに分かれて、読む箇所を分担し、科白の練習をする。 ※声の調子、言葉の切り方、リズムに注意して音読させる。</p> <p>③発表する。</p>

活用例4

学年	中学年（読むこと、伝統的な言語文化）
単元の目標 （時間）	○食に関することわざ等がどのような意味で使われているかを理解することを通して、昔の人の知恵に触れるとともに、適切に使えるようにする。（3時間）
教材	食に関することわざ等の例
	主な学習活動（※指導上の留意点）
授 業 展 開 (例)	<p>①食に関することわざ等とその解説を組み合わせる。</p> <p><例題> 大根おろしに医者いらず ^{あつもの}羹に懲りて ^{なます}膾を吹く</p> <p>丑の日の ^{うなぎ}鰻に梅干 山椒は小粒でぴりりと辛い</p> <p>^{えび}蝦で鯛を釣る 腐っても鯛 ^{なつ}蓼食う虫も好きずき</p> <p>青菜に塩 花より団子 等</p> <p>※児童になじみのある言葉も取り入れるようにし、親しみをもたせる。</p> <p>②食に関することわざ等について調べる。発表する内容をまとめる。</p> <p>③調べたことについて発表する。 ※グループに分かれて発表させる。</p>

活用案5

<p>学年 単元の目標 (時間)</p>	<p>中学年 (読むこと、伝統的な言語文化) ○古典の舞台になっている、大和・摂津・武蔵などの旧国名を通して古典に親しみ、それぞれの風土を知る。(3時間)</p>
<p>教材</p>	<p>昔話 唱歌や童謡 地図 (旧国名の記載された地図) 観光パンフレット</p> 
<p>授業展開 (例)</p>	<p style="text-align: center;">主な学習活動</p> <p>①昔話の「^{いなば}因幡の^{しろうきぎ}素兎」や、童謡や唱歌などに登場する旧国名を地図で探す。 <例題1> 傍線部の旧国名について、地図帳で調べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・速須佐之男命、宮造るべき地を<u>出雲</u>国に求ぎたまひき。(「古事記」) ・駿河の国にあるなる山なむ、この都も近く、天も近くはべる。(「竹取物語」) ・むかし、男ありけり。その男、<u>伊勢</u>の国に狩の使にいきけるに～。(「伊勢物語」) ・夜中ばかりに船を出だして、<u>阿波</u>の水門を渡る。(「土佐日記」) ・<u>尾張</u>の国、鳴海の浦を過ぐるに、夕汐ただ満ちに満ちて、～。(「更級日記」) ・<u>下野</u>国の住人、那須太郎資高が子に与一宗高こそ小兵で候へども手さきで候へ。 (「平家物語」) ・箱根路をわが越えくれば<u>伊豆</u>の海や沖の小島に波の寄るみゆ (源実朝) ・<u>丹波</u>に出雲と言ふ所あり。(「徒然草」) ・これは<u>武蔵</u>の国隅田川の渡守にて候ふ。(謡曲「隅田川」) ・<u>下総</u>の国葛飾郡真間の郷に、勝四郎といふ男ありけり。(「雨月物語」) ・七日快晴。(中略) <u>越前</u>領ニテ舟カリ、向へ渡ル。(「曾良随行日記」) ・行春を<u>近江</u>の人と惜しみける (松尾芭蕉) ・露通もこの港まで出で迎ひて、<u>美濃</u>の国へと伴ふ。(「奥の細道」) ・(神奈川の宿場の茶屋で) むすめ「お休なさいやアせ。奥がひろふございやす」 北八「おくがひろいはづだ。<u>安房上総</u>までつづいている。」(「東海道中膝栗毛」) ・しらぬひ<u>筑紫</u>の綿は身につけていまだは着ねどあたたく見ゆ(「万葉集」) <p>②観光パンフレットから、旧国名を探す。 <例題2> 下の()にあてはまる国名を入れる。また、同じようなものが他にないかを調べる。 ()いも ()くらげ ()うどん <例題3> 昔、相模のことを「相州」と呼んでいた。観光パンフレット等を見て、同じように「州」の付く旧国名について考える。 例) ア 紀州 イ 上州 ウ 信州 エ 奥州 オ 長州</p>

参考資料

ここまでで紹介した参考文献や資料以外に、古典に関する授業づくりに参考となる資料として、比較的入手しやすい書籍や Web ページを中心に紹介します。

刊行物

ア 辞書等

- ◆『古典文学を読むための用語辞典』
西沢正史編（東京堂出版 2002 年）
○行事・風俗・生活・和歌・連歌・俳諧・物語・小説・能・狂言・浄瑠璃・歌舞伎などのジャンルから 500 項目について解説しています。
- ◆『岩波日本古典文学辞典』
久保田淳編（岩波書店 2007 年）
○1540 項目について解説している辞典で、随筆・物語・戯曲にはあらすじを、歌人・俳人には代表歌句が掲載されています。付録には「古典文学史年表」もあります。
- ◆『日本昔話ハンドブック』
稲田浩二・稲田和子編（三省堂 2001 年）
○第二部には「日本昔話二百選—あらすじと解説」が掲載され、第四部では「資料編」として、昔話の用語・日本昔話資料集目録・日本昔話文献目録があります。
- ◆『歴史から生まれた日常語の由来辞典』
武光誠著（東京堂出版 1998 年）
○歴史上の事件や人物に由来をもつ日常語 520 について解説しています。身近な言葉の由来、語源や時代による意味の変化、用例が分かる辞典です。
- ◆『新編 国歌大観』全 10 巻 20 冊
新編国歌大観編集委員会（角川書店 1983～1992 年）
○万葉集・二十一代集、私撰集・私家集、史書・日記・随筆・物語などの和歌の集成及び句索引です。和歌には番号が付けられています。

※古典文学に関する参考書籍

- 『日本古典文学大系』（岩波書店）
- 『日本古典文学全集』（小学館）

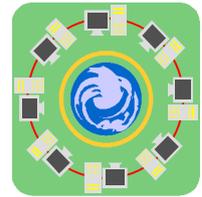
※落語に関する参考書籍

- 『落語を楽しもう』石井明著（岩波ジュニア新書 1999 年）
- 『古典落語 CD の名盤』京須借充著（光文社新書 2005 年）
- 『落語と私』桂米朝著（文藝春秋 1986 年）

イ 教材

- ◆『光村の国語 読んで、演じて、みんなが主役!』全3巻
工藤直子・高木まさき監修 (光村教育図書 2007年)
- ◆『光村の国語 わかる、伝わる、古典のこころ』全3巻
工藤直子・高木まさき監修 (光村教育図書 2009年)
- ◆『朗唱 漢詩漢文 よみがえる日本語のひびき心に残る名詩名句77』
全国漢文教育学会編 (東洋館出版社 2003年)
- ◆『小学校で覚えたい古文・漢文・文語詩の暗唱50選』
大越和孝編、安達知子・安部朋世・西田拓郎著 (東洋館出版社 2007年)
- ◆『決定版 心をそだてるはじめての落語101』
高田文夫監修 (講談社 2008年)
- ◆『楽しく遊ぶ学ぶ きせつの図鑑』
長谷川康男監修 (小学館 2007年)

インターネット



- ◆神奈川県立総合教育センター
神奈川の地域学習資源 リンク集
<http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/chiiki/>
○神奈川の博物館、郷土資料館等のホームページや、教育研究所等が作成したデジタル教材へのリンク集のページで、地域の古典文学に関するページにもリンクしています。
学びの宝箱 KANA・ボックス
<http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/kanabox/>
○古典に関する素材や理科(月)に関する画像素材があります。
- ◆国際日本文化研究センター
和歌データベース
<http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/waka.html>
○勅撰集(二十一代集)、万葉集などの私撰集及び主要な私家集の和歌について検索することができるデータベースです。
- ◆NHK デジタル教材「10min.ボックス」
<http://www.nhk.or.jp/10min/>
○中学・高校の学習で活用できる映像番組として、古文・漢文の番組が視聴できます。

◆大学共同利用機関法人人間文化研究機構

国文学研究資料館

<http://www.nijl.ac.jp/>

- 「電子資料館」のページには、「書誌・目録データベース」、「本文データベース」、「画像データベース」が設置されています。
- 「本文データベース」には、次のようなものがあります。
 - ・日本古典文学本文データベース
「日本古典文学大系」(旧版、岩波書店刊)の全作品(100巻580作品)の本文(テキスト)データベース(利用登録制)
 - ・二十一代集(和歌)
原本テキストデータベース(当館所蔵の正保版本を底本とし、詞書・作者・和歌・左注・メモ等からの検索が可能)
- 「画像データベース」には、「歴史人物画像データベース」、「新奈良絵本画像データベース」などがあります。

◆情報処理推進機構

教育用画像素材集

<http://www2.edu.ipa.go.jp/gz2/list.html>

- 「文化」に関する項目があり、「能と狂言」、「文楽(人形浄瑠璃)入門」などがあります。

◆国際デジタル絵本学会

デジタル絵本サイト

<http://www.e-hon.jp/index.htm>

- 世界各国の民話を基にした様々な絵本を見ることができます。絵本は、様々な言語で紹介されています。

◆浜島書店

国語の広場

<http://www.hamajima.co.jp/kokugo/>

- 中学校の内容ですが、国語便覧のリンク集などもあり、色々なことが調べられます。

◆光村図書(光村チャンネル)

子どものためのリンク集

<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/data/kodomo/>

- 小学生(1～6年)と中学生(1～3年)の「国語」等について調べることができる子どものためのリンク集です。

大人のためのリンク集

<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/data/otona/>

- 小学生(1～6年)と中学生(1～3年)の「国語」等について調べることができる大人用のリンク集です。

『古典に親しもう～小学校における古典教材と指導参考資料～』の作成関係者

<助言者>

所 属	職 名	氏 名	備 考
横浜国立大学	教 授	高木 まさき	平成 19、20 年度
横浜国立大学	教 授	三宅 晶子	平成 19、20 年度

<調査研究協力員>

所 属	職 名	氏 名	備 考
茅ヶ崎市立円蔵小学校	総括教諭	山本 哲史	平成 20 年度
平塚市立松が丘小学校	総括教諭	葛西 裕美子	平成 20 年度
大井町立大井小学校	総括教諭	神戸 泉	平成 19、20 年度
平塚市立山下小学校	教 諭	小瀬村 良美	平成 19 年度
南足柄市立南足柄中学校	教 諭	村田 哲	平成 19、20 年度
小田原市立国府津中学校	総括教諭	西田 孝予	平成 19、20 年度
愛川町立愛川中原中学校	総括教諭	片山 智絵子	平成 19、20 年度

<研究協力機関>

機 関 名	備 考
横浜国立大学 教育人間科学部附属鎌倉小学校	平成 19、20 年度
横浜国立大学 教育人間科学部附属鎌倉中学校	平成 19、20 年度

<神奈川県立総合教育センター>

所 属	職 名	氏 名	備 考
カリキュラム支援課	指導主事	吉田 佳恵	平成 19、20 年度
カリキュラム支援課	指導主事	神橋 憲治	平成 20 年度
カリキュラム支援課	教育指導専門員	伊藤 伸子	平成 20 年度
カリキュラム支援課	指導主事	大久保 敦	平成 19 年度
カリキュラム支援課	教育指導専門員	長倉 英之	平成 19 年度

古典に親しもう～小学校における古典教材と指導参考資料～

発 行 平成 21 年 3 月

発行者 安藤 正幸

発行所 神奈川県立総合教育センター

〒251-0871 藤沢市善行 7-1-1

電話 (0466)81-1659 (カリキュラム支援課 直通)

ホームページ <http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/>

※本冊子は、ホームページで閲覧できます。

再生紙を使用しています



神奈川県立総合教育センター

カリキュラムセンター（善行庁舎）

〒251-0871 藤沢市善行 7-1-1

TEL (0466) 81-0188

FAX (0466) 84-2040

ホームページ <http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/>

教育相談センター（亀井野庁舎）

〒252-0813 藤沢市亀井野 2547-4

TEL (0466) 81-8521

FAX (0466) 83-4500

